

過日集史料 其の二 (『過日集』書誌・龔鼎孳「詠懷」・龔鼎孳・周亮工・歸莊伝)

Historical materials of "Guo ri ji." NO.2

藤井良雄

FUJII Yoshio

(国語教育)

(平成二十六年九月三十日受理)

はじめに

前号(紀要六十二号)の続きを「その二」として掲載する。まず『過日集』の書誌について記す。『商舶載來書目』に『過日集』の記載を見つけたので、影印を掲載する。次に『過日集』には、詠懐詩がかなり選択収載されているが、龔鼎孳の「詠懐」が卷四「五言古詩」に十一首も選載されているので、その研究史料として阮籍詠懐詩の何詩に和韻しているのかを確認し、阮籍「詠懐」に対する和韻詩であるので、原詩である阮籍「陳留詩」(文選注)も記載した。附録として『清代人物伝稿』中から「龔鼎孳・周亮工・歸莊」の伝記を訳載した。この三人ともに、『過日集』の詩人である。

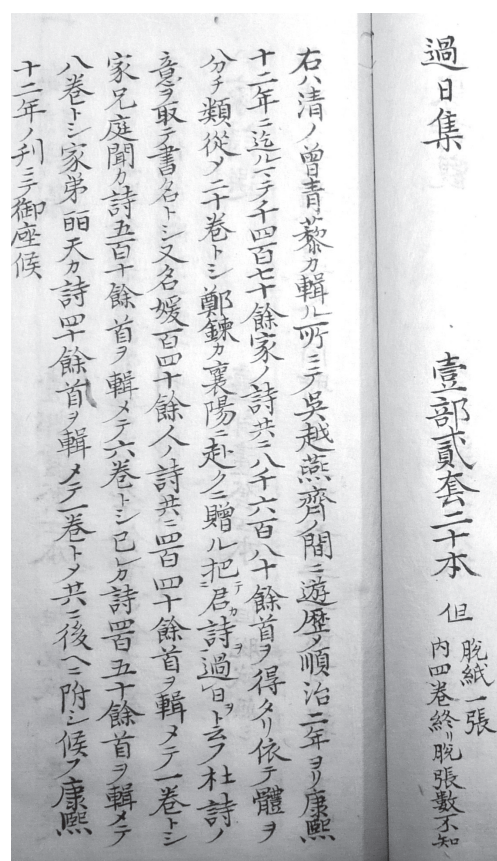
一、『過日集』の書誌

『過日集』の舶載された記録が国立国会図書館蔵の『商舶載來書目』

の「寶曆四年甲戌(一七五四年)の記録に見られる。それは、次のとおりである。幸いにも該当部分が国立公文書館にも所蔵されておりその影印も列挙する。「寶曆甲戌年舶來書籍大意書戌番外船」。

一過日集 壹部貳套二十本 但 脱紙一張 内四卷終り脱張数不知
右ハ清ノ曾青藜ガ輯ル所ニテ吳越燕齊ノ間ニ遊歴シテ、順治二年
ヨリ康熙十二年ニ迄ルマデ千四百七十餘家ノ詩共ニ八千六百八十
餘首ヲ得タリ。依テ(詩)體ヲ分チ類從シテ二十卷トシ、「鄭鍊
ガ襄陽ニ赴クニ贈ル」ノ「君ガ詩ヲ把テ日ヲ過ス」ト云フ杜詩ノ
意ヲ取テ書名トシ、又名媛百四十餘人ノ詩共ニ四百四十餘首ヲ輯
メテ一卷トシ家兄庭聞ガ詩五百十餘首ヲ輯メテ六卷トシ、己レガ
詩四百五十餘首ヲ輯メテ八卷トシ家弟詒天ガ詩四十餘首ヲ輯メテ
一卷トシテ共ニ後ヘニ附シ候フ康熙十二年(一六七三)ノ刊ニテ
御座候。

この書誌を記したのは、巻末に記名されている向井玄尚である。



この記録では、『過日集』掲載詩人総数一四七〇余名、詩数は八六八〇余首を挙げて、「詩集」題名の由来について、杜甫の詩を指摘している。この詩集題目「過日」の語は、龔鼎孳の序文と曾燦の凡例にも説明がある。この詩人数の詩がすべて伝来すれば、かなり膨大な詩総集となるであろうが、題下に「脱紙一張 内四巻終わり脱張数知れず」と注記されており、この舶載書目の記述でも正確な詩人数・詩数は不明である。

さて、国内（内閣文庫）現存する『過日集』は二セット存在するが、以下に述べるように残念ながらどちらも完本ではない。『内閣文庫所蔵漢籍分類目録』四〇三頁には

(A) 過日集 二〇巻諸体評論一卷 清曾燦編 清康熙一二序刊

昌、四〇

(B) 同 同・名媛全八卷曾青黎詩八卷曾麗天詩一卷曾庭聞詩六卷

毛、二〇

行末部の「昌」字が「昌平坂学問所蔵」と「毛」字は「毛利高標所蔵」本であることを示す。これまでの調査で(A)昌本と(B)毛本とを比較すれば、分量的にも二〇冊の(B)毛本が二〇巻廿冊とするための整形本であり、もともと『過日集』掲載の詩人と詩とをすべて伝えていないのではないと判明する。その省略された詩人と詩作は、(A)昌本で補充できることも明らかになる。補充できた詩人名は附録として附した『過日集』掲載詩人総表」の該当巻末部の詩人名の頭部に・印を付けて表示した。ただし、(A)昌本は完本に見せかけるために偽造されていることも判明した。次頁の写真で確認できる。(A)昌本の巻十二の目録中、折よく墨黒消し箇所があったので、その空白に「過日集巻十三」と墨で書き入れがなされている。次ページ掲載写真の「目録」で右側が(A)昌本『過日集』である。左側が(B)毛本の該当箇所。(A)昌本の過日集は巻十二を分割しているのである。

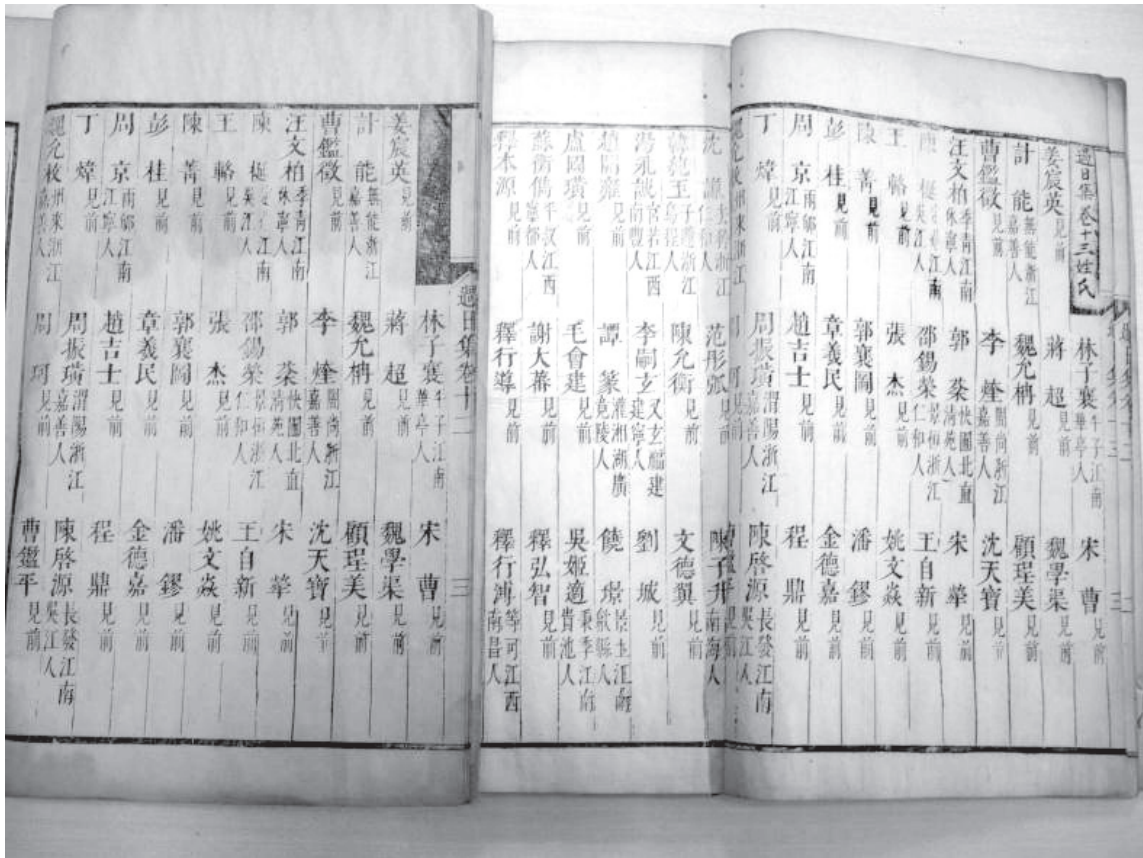
それ故、他の『過日集』の完本を実見する必要があった。

上海図書館および南京図書館にも『過日集』は所蔵されているが、南京図書館のもの①はやはり整形本であった。上海図書館で実見した『過日集』は内閣文庫蔵の(A)昌本『過日集』と装幀もよく似ており、この漢籍には巻十三が残っていた。次の詩人名が加えられる。

『過日集』巻十三の終末部には、もともと次の八名の詩人の詩が掲載されていることが判明する。

「胡亦堂・韓作棟・謝適・程開瀛・湯永寛・查嗣琛・呉雯・陸競烈」の八名の「五言律」詩が、内閣文庫蔵『過日集』の追加部分として上海図

書館本『過日集』で読むことが出来る。



注

① 南京図書館所蔵『過日集』…『清初人選清初詩彙考』（南京大学出版社1998）では南京図書館蔵二十卷本『過日集』は「完本」と記載されていたが、現地で見ると完本ではなく（B）本に近いもので、整形本であった。それでも、（A）昌本・（B）毛本の目録中「胡」「方」と記すのみで不明であった詩人名が巻一「胡國柱」「方光琛」・巻三「胡國柱」「方光琛」であると判明する。

二、『過日集』詠懷詩

（卷四・五言古）龔鼎孳（龔芝麓）詠懷詩 用阮公原韻 選十一

1. 『過日集』

【阮籍詠懷其二】『文選』一

春岡芬瑤草 皓月流素琴

夜中不能寐 起坐彈鳴琴

雲動諧麗矚 練淨澄曲襟

薄帷鑑明月 清風吹我襟

車馬何赫奔 所思在中林

孤鴻號外野 朔鳥鳴北林

長沮與石戶 遺世良苦心

徘徊將何見 憂思獨傷心

（其二）2.

【阮籍詠懷其二】『文選』一一

神龍無定跡 文禽恣遐翔

二妃遊江濱 逍遙順風翔

繁英各斌媚 寶此孤蘭芳

交甫懷環珮 婉孌遊芬芳

山澤苟有托 富貴理可忘

猗靡情歛愛 千載不相忘

薛芟裁我衣 葵藿充我腸

傾城迷下蔡 容好結中腸

青霞開松牖 丹竈森芝房

感激生憂思 萱草樹蘭房

濯纓萬里流 晞髮千峰陽

膏沐為誰施 其雨怨朝陽

顧視塵中子 戚促誠憫傷

如何金石交 一旦更離傷

（其三）3.

【阮籍詠懷其三】『文選』三三

青門亦有瓜 於陵亦有李
榮華非金石 安能保終始

嘉樹下成蹊 東園桃與李
秋風吹飛藿 零落從此始

平生一悅已 灰沒何能忘
(其六) 16

丹青著明誓 永世不相忘
【阮籍詠懷其十七】『文選其十五』

昔時王侯宅 珠玉化榛杞
狐狸穿丘墓 云是層臺址

繁華有憔悴 堂上生荆杞
驅馬舍之去 去上西山址

沙中聚白骨 云是長征者
浮雲蔽天來 何時無甲馬

獨坐空堂上 誰可與親者
出門臨永路 不見行車馬

歲盡歡不延 誰為羨門子
飲酒悟達生 身後名可已

一身不自保 何況戀妻子
凝霜被野草 歲暮亦云已

蒿藜盛城郭 不辨非原野
百慮悞倉卒 隱忍金鐵下

登高望九州 悠悠分曠野
孤鳥西北飛 離獸東南下

(其三) 4.

【阮籍詠懷其四】『文選』五

(其七) 19

【阮籍詠懷其二十一】

彭殤盡一壑 服食豈聞道

天馬出西北 由來從東道

星漢耿終夕 桂鏡方向冥

於心懷寸陰 羲陽將欲冥

崎嶇學神仙 憂樂難自保

春秋非有託 富貴焉常保

微曦隱東嶽 宿鳥嗣晨征

揮袂撫長劍 仰觀浮雲征

容華若桃李 努力就衰草

清露被皋蘭 凝霜霑野草

經亂無安眠 忱聞行子聲

雲間有玄鶴 抗志揚哀聲

何如東方主 詠諧以終老

朝為美少年 夕暮成醜老

側耳交然疑 飢鼠空梁鳴

一飛沖青天 曠世不再鳴

割肉貽小妻 能使顏色好

自非王子晉 誰能常美好

艱難不自料 萬里生閨庭

豈與鶉鷄遊 連翩戲中庭

(其四) 6.

【阮籍詠懷其六】『文選』九

(其八) 20

【阮籍詠懷其二十三】

天馬騁絕足 乃在萬里外

昔聞東陵瓜 近在青門外

元精相代禪 嘉侯當青陽

東南有射山 汾水出其陽

崑崙俯長河 邈若一衣帶

連畛距千百 子母相鈎帶

天地氣以盛 蔚為四序綱

六龍服氣輿 雲蓋覆天綱

高視凌八極 動與昭曠會

五色曜朝日 嘉賓四面會

珍卉廣被野 輕雲秀葯房

仙者四五人 逍遙宴蘭房

曲子徇榮各 更為七尺害

膏火自煎熬 多財為患害

草木各自壽 百歲無繁霜

寢息一純和 呼噏成露霜

周身策已愚 斯世亦何賴

布衣可終身 寵祿豈足賴

焉知義馭迫 無葉停景光

沐浴丹淵中 炤耀日月光

(其五) 12.

【阮籍詠懷其十二】『文選』四

(其九) 25

【阮籍詠懷其二十八】

夙昔入宮時 蛾眉傾昭陽

昔日繁華子 安陵與龍陽

迢迢園中絮 隨風已飛翔

豈安通靈臺 游漾去高翔

承恩一顧盼 行步搖華光

夭夭桃李花 灼灼有輝光

貞松峙層崖 杜若森芳洲

若木耀西海 扶桑翳瀛洲

何期中道捐 華髮飄素霜

悅澤若九春 譬折似秋霜

孤者易表研 百草爭與讎

日月經天塗 明暗不相讎

殊麗既難明 含貞亦不芳

流盼發姿媚 言笑吐芬芳

孔翠有羽毛 羅網紛相求

窮達自有常 得失又何求

玉鏡疑我姿 秋風穿我裳

攜手等歡愛 宿昔同衣裳

麟鳳亦畏人 郊藪無常遊

豈效路上童 攜手共遨遊

時去顏色賤 團扇徒廻翔

願為雙飛鳥 比翼共翱翔

悼彼宣聖言 乘桴乃遠浮

陰陽有變化 誰云沈不浮

靈均秉奇操 涕歎盈中洲

朱鼈躍飛泉 夜飛過吳洲

滔滔非所托 委身任洪流

俛仰運天地 再撫四海流

行步一顛躓 砥道無安痲

繫累名利場 驚駭同一痲

平生超世心 戚戚徒離憂

豈若遺耳目 升遐去殷憂

(其十) 33

【阮籍詠懷其三十六】

玉杵有靈藥 持以奉長生

誰言萬事難 逍遙可終生

青鳥下來視 玉女紛奇形

臨堂翳華樹 悠悠念無形

瑤沙不可即 龍馭忽已冥

彷徨思親友 攸忽復至冥

至今茂陵道 秋草傷人情

寄言東飛鳥 可用慰我情

(其十一) 40

【阮籍詠懷其四十五】

水覆不再收 落花無重榮

幽蘭不可佩 朱草為誰榮

昔憂杞梁妻 一哭崩人城

修竹隱山陰 射干臨增城

骨肉化為土 終古不欲生

葛藟延幽谷 綿綿瓜 生

死亦復何樂 強生非其情

樂極消靈神 哀深傷人情

人壽苟難忍 拙矣需河清

竟知憂無益 豈若歸太清

『過日集』(卷四・五言古) 龔鼎孳「詠懷詩」用阮公原韻 選十一

(其一)

神龍無定跡 文禽恣遐翔

神龍 定跡なく 文禽恣いままに遐翔す

繁英各斌媚 寶此孤蘭芳

繁英 各、斌媚 此の孤蘭芳を宝とす

山澤苟有托 富貴理可忘

山沢に苟くも托するあらば 富貴は理めて忘るべし

薜芰裁我衣 葵藿充我腸

薜芰もて我衣を裁ち 葵藿もて我が腸に充つ

青霞開松牖 丹竈森芝房

青霞 松牖を開き 丹竈 芝房森たり

濯纓萬里流

晞髮千峰陽

纓を濯ふ万里の流 髮を晞かす千峰の陽

顧視塵中子

戚促誠憫傷

塵中子を顧視するに 戚促として誠に憫傷たり

青門亦有瓜

於陵亦有李

青門に亦た瓜あり 於陵に亦た李あり

榮華非金石

安能保終始

榮華は金石にあらず 安くんぞ能く終始を保たんや

(其二)

昔時王侯宅

珠玉化榛杞

昔時 王侯の宅 珠玉も榛杞と化す

狐狸穿丘墓

云是層臺址

狐狸も丘墓を穿ち 是れ層台の址と云ふ

歲盡歡不延

誰為羨門子

歲尽きて 歎も延びず 誰か羨門子たりて

飲酒悟達生

身後名可已

飲酒して 達生を悟り 身後 名已むべし

(其三)

彭殤盡一壑

服食豈聞道

彭殤 一壑に盡き 服食して豈に道を聞かんや

崎嶇學神仙

憂樂難自保

崎嶇として神仙を学び 憂樂 自から保ち難し

容華若桃李

努力就衰草

容華 桃李の若く 努力して衰草に就かん

何如東方生

詠諧以終老

何如ぞ東方生 詠諧にして以て終老し

割肉貽小妻

能使顏色好

肉を割いて小妻に貽り 能く顔色をして好からしむるは

(其四)

天馬騁絕足

乃在萬里外

天馬 絶足を 騁せ 乃ち萬里の外に在り

崑崙俯長河

邈若一衣帶

崑崙 長河に俯し 邈として一衣帯の若し

高視凌八極

動與昭曠會

高く視て八極を凌ぐ 動もすれば昭曠と会さ

ん

曲子徇榮名 更為七尺害 曲子 榮名に徇ひ 更に七尺に害せらる
周身策已愚 斯世亦何頼 周身策已だ愚なり 斯の世 亦た何に頼らん

(其五)

夙昔入宮時 蛾眉傾昭陽 夙昔入宮の時 蛾眉 昭陽(殿)を傾く
承恩一顧盼 行步搖華光 恩を承けて一たび顧盼し 行歩すれば華光搖
ぐ
何期中道捐 華髮飄素霜 何をか期せん中道に捐てらるるを 華髮 素
霜飄へる
殊麗既難明 含貞亦不芳 殊麗既に明らかなり難し 貞を含むも亦た芳
しからず

玉鏡疑我姿 秋風穿我裳 玉鏡には我が姿を疑ひ 秋風 我が裳を穿つ

時去顔色賤 團扇徒廻翔 時去らば顔色賤しく 團扇徒らに廻翔す

平生一悦已 灰没何能忘 平生一たび悦已 灰没して何ぞ能く忘れんや

沙中聚白骨 云是長征者 沙中 白骨聚まり 是れ長征者なりと云ふ

(其六)

浮雲蔽天來 何時無甲馬 浮雲 天を蔽ひ來り 何れの時か 甲馬無か
蒿藜盛城郭 不辨非原野 蒿藜 城郭に盛んに 原野に非ざるを辨せず
百慮悞倉卒 隱忍金鐵下 百慮も倉卒に悞り 隱忍せり 金鐵の下
有身不自謀 臨風淚交寫 身有りて自から謀らず 風に臨み 涙交も写
ぐ

(其七)

星漢耿終夕 桂鏡方向冥 星漢 耿として終夕 桂鏡 方に冥になん
んとす

微曦隱東嶽 宿鳥翩晨征 微曦東嶽に隱れ 宿鳥晨征に翩る

經乱無安眠 忱聞行子聲 乱を経て安眠無く 忱れて聞く 行子の声

側耳交然疑 飢鼠空梁鳴 耳を側だて交然疑ひ 飢鼠 空しく梁に鳴く
艱難不自料 萬里生閨庭 艱難 自から料らず 万里 閨庭生ず

(其八)

元精相代禪 嘉侯當青陽 元精 相代禪し 嘉侯 青陽に当たる
天地氣以盛 蔚為四序綱 天地氣以て盛んに 蔚として四序の綱たり
珍卉廣被野 輕雲秀葯房 珍卉広く野に被ひ 輕雲 葯房に秀たり
草木各自壽 百歲無繁霜 草木各自寿あり 百歲 繁霜なし
焉知義馭迫 無葉停景光 焉くんぞ知らん 義馭迫し 景光を停むる葉
なし

迢迢園中絮 隨風已飛翔 迢迢たり園中の絮 風に随つて已に飛翔す

(其九)

貞松峙層崖 杜若森芳洲 貞松 層崖に峙し 杜若 芳洲に森たり
孤者易表研 百草争與讎 孤なる者 研を表し易く 百草 争でか与に
讎たらん

孔翠有羽毛 羅網紛相求 孔翠 羽毛あり 羅網紛として相ひ求めらる
麟鳳亦畏人 郊藪無常遊 麟鳳亦た人を畏れしめ 郊藪 遊するに常な
し

悼彼宣聖言 乘桴乃遠浮 彼の聖言を宣するを悼み 桴に乗りて乃ち遠
く浮ぶ

靈均秉奇操 涕歎盈中州 靈均 奇操を秉り 涕歎 中州に盈つ

滔滔非所托 委身任洪流 滔滔として托する所に非ず 身を委ね洪流に
任さん

行歩一顛躓 砥道無安輞 行歩するに 一つに顛躓し 砥道 安輞なし

平生超世心 戚戚徒離憂 平生 世を超するの心 戚戚として徒に憂に
離る

(其十)

玉杵有靈藥 持以奉長生 玉杵に靈藥あり 持ち以て長生を奉ず
青鳥下來視 玉女紛奇形 青鳥下り來視するに 玉女紛として奇形なり
瓠沙不可即 龍馭忽已冥 瓠沙 即くべからず 龍馭忽として已に冥し
至今茂陵道 秋草傷人情 今に至るまで茂陵の道 秋草 人情を傷ましむ

(其十一)

水覆不再收 落花無重榮 水覆れば 再び收めず 落花 重ねて榮く
昔憂杞梁妻 一哭崩人城 昔憂ふ 杞梁の妻 一哭すれば人城崩るるを
骨肉化為土 終古不欲生 骨肉も化して土と為り 終古まで生くるを欲せず
死亦復何樂 強生非其情 死して亦た復た何の樂しみかあらん 強いて生くること其の情に非ず
人壽苟難忍 拙矣需河清 人壽苟くも忍び難く 拙なり矣 河清を需むるは

(其十二)

『過日集』(卷十・五律) 龔鼎孳「秋懷詩二十首和(李)舒章」 選四
金門棲隱日 有客破苔封 金門棲隱の日 客ありて苔封を破る
愁豈人言始 情惟我輩鐘 愁ひ 豈に人言始まらん 情 惟だ我輩の鐘
浮雲催別鶴 落日滿慮籠 浮雲 別れを催すの鶴 落日 慮滿つるの籠
最易高陽社 能憐阮仲容 最も易し 高陽の社 能く憐まん 阮(咸)仲容

懷燕都邸同社諸子也。(燕都邸の同社諸子を

懷ふなり。)

(其十二)

自得蓴鱸味 江東老步兵 自から得たり 蓴鱸の味 江東の老步兵
漁樵無善地 烟月坐荒城 漁樵 善き地なく 烟月 荒城に坐す
群態紛朱戟 千峰尚戰旌 群態 朱戟紛たり 千峰尚お戰旌あり
愁中橫笛晚 天地一秋聲 愁中 横笛の晚 天地 一つに秋聲

(其十三)

幾年懷故里 白雁晚沙中 幾年ならん 故里を懷ふ 白雁 晚沙の中
及此傷浮梗 無如飽朔風 此に及び 浮梗を傷む 朔風に飽くに如くな

草從何代碧 楓已萬山紅 草 何代より碧ならん 楓 已に萬山紅なり
小隱慙叢桂 江流日夕東 小隱 叢桂を慙じ 江流 日夕に東す

(其十四)

海陵高士集 風物擬南州 海陵 高士集ひ 風物 南州に擬す
對酒青桐暮 懷人白露秋 酒に對す 青桐の暮 人を懷ふ 白露の秋
夢遙依草閣 書到問扁舟 夢遙かなり 草閣に依り 書到りて 扁舟を問ふ

燦爛何山石 相期對飯牛 燦爛たり 何れの山石ぞ 飯牛に對するを相期す
懷吳陵同社諸子也。(吳陵の同社諸子を懷ふなり。)

*『定山堂詩集』卷六「秋懷詩二十首和李舒章韻 偶簡敝簾、見舒章甲申秋懷詩、于時秋也。客亦有懷、因用其韻、自述近況。」

『週日集』掲載詩人名表

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十	卷十一	卷十二	卷十三	卷十四	卷十五	卷十六	卷十七	卷十八	卷十九	卷二十
魏謙益 徐開仁 魏長興 魏長緒 沈泰 陳進美 李肅 秦松齡 魏謙益 宋履 姜辰英 孫自式 魏際端 宗元瑞 魏禮 李世傑 魏書 李潘光 李謙 李潘蛟	徐依 汪謙 魏芝 汪謙 陳玉瑛 …… 施四章 …… 邵長衡 ……	吳偉業 王仁 徐開仁 陳玉瑛 周亮工 錢謙益 陳維崧 王士禎 韓洽 馮班 楊貞 顧祖禹 吳嘉紀 傅山 湯斌 顧頡 唐大陶 方長 顧景星 潘耒	魏謙益 魏禮	魏謙益 朱華尊 魏禮 邵長衡 *梁以樟 吳應謙 梁佩蘭 易学实 *汪森 錢謙益 魏商介 冒襄 吳洪 屈大均 蔡秦春 朱徵 徐乾學 朱鼎 李燾 董漢策	吳偉業 熊鼎 徐卓 王廷益 周亮工 錢謙益 周亮工 錢謙益 吳應謙 *方文 方以智 錢謙益 魏商介 冒襄 吳洪 屈大均 蔡秦春 朱徵 徐乾學 朱鼎 李燾 董漢策	錢謙益 徐成 彭孫通 趙進美 陳玉瑛 魏禮 施潤章 …… 邵長衡 …… 梁以樟 …… 吳應謙 *方文 錢謙益 魏商介 冒襄 吳洪 屈大均 蔡秦春 朱徵 徐乾學 朱鼎 李燾 董漢策	杜濬 余思復 汪琬 劉昌福 侯方域 毛珪 沈泰 吳偉業 徐開仁 杜濬 陳維崧 *韓洽 毛珪 錢謙益 歸莊 魏禮 潘耒	宋履 周亮工 張文光 施潤章(9首) 魏禮(9首) 魏禮(9首) 魏謙益 閻若遠 陳維崧(6首) *錢邦芭 陳維崧 *方文 陳昨明 屈大均 金是謙 魏際端 徐開仁「秋懷」 彭士望	王士禎 陳炳 金侃 楊昌言 魏謙益(66首) 冒襄 吳應謙 *方文 陳昨明 屈大均 金是謙 魏際端 徐開仁「秋懷」 彭士望	光祿 趙湘 許此 戴正矩 韋人鳳 徐繼恩 何安世 潘錫晉 徐乾學 方以智 金俊明 胡國柱 傅山 申國光 蔡秦春 李因篤 邵長衡	興鼎學(44首) 葉衍崇 徐廷敬 冒襄 錢謙益 吳偉業 宋履 汪琬 汪琬 王士禎 趙吉士 陳玉瑛 *韓洽 屈大均 顧炎武 歸莊 孫綠 錢秉鏡 鄧漢儀 陳昨明 徐尊嘉「秋懷」 黃周星 徐元文 吳嘉紀 盛大綱	施周章 唐允甲 周蘭梅 康范生 朱庚生 李念慈 周茂源 張玉書 王士禎 趙吉士 陳玉瑛 *韓洽 屈大均 顧炎武 歸莊 孫綠 彭而述 徐乾學 張鑾	趙進美 吳頌 劉正學 申爾光 周亮工 杜濬 陳維崧 朱華尊 李雯 歸莊「落花詩」 萬壽基 余懷 姜垓 閻若璩 周路 蕭一鶚 黃笏 魏賢 黎際暉 張潮 張韻 楊以淑 王披 吳升東 文在茲 孫爾珩 興志阜 興志益 興志 楊寶 魏世儼 史周 韓作棟 謝適 程開灑 湯永言 李振雲 汪煜 張大綱 王吉人 顧嗣立	錢曾 魏禮 魏禮 毛珪 邵長衡 洪國光 魏際端 吳應謙 董說「落花」 方以智 蔡仲統 徐偉 李因篤 梁佩蘭 59釋今無 60釋大綱 61釋本源 62釋智敏 63釋本草 64釋洪備 65釋通復 66釋兩呈 67釋今無 68釋弘度 69釋宗清 54釋宗清 55釋明智 56釋大健 57釋大德 58釋能印	毛珪 邵長衡 錢謙益 余懷 李元鼎 余向 劉良玉 朱一是 方文 王士禎 施潤章 陳玉瑛 顧炎武 屈大均 趙吉士 朱華尊 李雯 歸莊「落花詩」 萬壽基 余懷 姜垓 閻若璩 周路 蕭一鶚 黃笏 魏賢 黎際暉 張潮 張韻 楊以淑 王披 吳升東 文在茲 孫爾珩 興志阜 興志益 興志 楊寶 魏世儼 史周 韓作棟 謝適 程開灑 湯永言 李振雲 汪煜 張大綱 王吉人 顧嗣立	彭而述 趙進美 趙進美 孫自式 周休觀 戴廷孝 董以孝 興鼎學 嚴繩孫 毛珪 沈叔宏 曹申吉 張傑 陳文英 吳應謙 王士禎 朱華尊 *韓洽 魏喜 顧炎武 宋履 朱華尊 吳應謙 方文 屈大均 孫綠「落花」 屈大均 劉學瑞 韓洽 吳偉業 呂士鶴 88釋行悅 89釋明孟 (十七名) 89釋通秀 90釋通秀 91釋通秀 92釋通源 93釋通源 94釋行導 95釋大鏡 96釋大油 97釋能印	錢謙益 李元鼎 興鼎學(15首) 王士禎 冒襄 魏禮 施潤章 毛珪 陳玉瑛 周亮工 杜濬 孫綠 金俊明 顧炎武 徐元文 馮班 吳應謙 方以智 方文 孫綠「落花」 屈大均 劉學瑞 韓洽 吳偉業 呂士鶴 88釋行悅 89釋明孟 (十七名) 89釋通秀 90釋通秀 91釋通秀 92釋通源 93釋通源 94釋行導 95釋大鏡 96釋大油 97釋能印	錢謙益 李元鼎 興鼎學(15首) 王士禎 冒襄 魏禮 施潤章 毛珪 陳玉瑛 周亮工 杜濬 孫綠 金俊明 顧炎武 徐元文 馮班 吳應謙 方以智 方文 孫綠「落花」 屈大均 劉學瑞 韓洽 吳偉業 呂士鶴 88釋行悅 89釋明孟 (十七名) 89釋通秀 90釋通秀 91釋通秀 92釋通源 93釋通源 94釋行導 95釋大鏡 96釋大油 97釋能印	

④附録資料

『清代人物伝稿 上篇』より

A 龔鼎孳傳 何 齡 修 (19) 頁

B 周亮工傳 許 敏 (27) 頁

C 歸 莊傳 王 思 治 (33) 頁

A 龔鼎孳伝 (『清代人物伝稿 上編 第四卷』240~249頁)

何 齡 修

藤井良雄 訳

龔鼎孳、字は孝升、芝麓と号す。廬州府の合肥(現在・安徽省合肥市)の籍であり、江西臨川(現在・撫州市)人である。彼は明の萬曆四十三年十一月十七日(1616.1.5)に生まれ、清の康熙十二年九月十二日(1673.10.21)亡くなる。彼の生涯では詩文著作の面で成就するところがあり、清初江左三大家の一人と称えられたが、彼は政治の大局面中自身一家を保全し、節操なく「朝秦暮楚」で叛服常なかつた。

彼の祖父は龔承先といい舉人で、かつて州の縣官に任じていた。父は孚肅といい、読書して出仕しなかつた。伯父は萃肅といい、進士であり、闕党の一人で、天啓時代末、官位は太僕寺少卿までになった。魏忠賢の失脚後、龔萃肅は逆に崔呈秀や田爾らを厳しく弾劾し自ら罪を免れようと図つた。だが、最後には馮銓・阮大鍼らの流輩の逆案人物名表により、「交わり近侍と結びまた次等」「徒に坐すること三年、贖いを納めて民の為にす」^①となる。龔鼎孳は伯父・龔萃肅を「最も行なし」^②と罵るが、政治上で彼の些かの影響を受けることは免れなかつた。

龔鼎孳の資質は聡明であり、先人の教えを「手ずから経書を授かり、親しく課督を加え、丙夜ならざれば就寝せず」^③ほど努めた。崇禎五年

(1632)進學し、崇禎六年科挙(郷試)に合格、七年には続けて勝利し進士となった。

彼は官途にのぼるとすぐに農民起義に対抗することになる。崇禎八年(1635)湖広蕪水(今の湖北省浠水)県知事職に着いた。当時、農民起義の戦火はすでに蕪水のある江北一帯に燃え広がっていた。一年以上前から、掃地王(曹威)などの部隊の農民軍は当地をひっきりなしに往来し、城市まちを攻め土地を攻略し、官府側は驚き常に恐れ騒いだ。龔鼎孳は着任するとさっそく「増城浚濠以守」^④(城壁を増し堀を浚深し堅守)し、緊張の時も城壁にのほり防御した。戦時の間隙には、彼は兵餉を準備し調べ、流民たちを招集し、さらに同時に文教を振興することにも注意を払つた。

多くの封建官僚たちと同じく、明朝の統治は汲々として危険極まりなかつたが、彼はなおある種の両面生活を暮らしていた。崇禎十二年(1639)冬、穀城(湖北省)の変乱後、農民軍はまた新しく急に起兵した。古くからのイスラム教徒など部族二万人が蕪水の東隣各県の砦に駐屯し、「賊は」多く蕪人・黄人より購ひて(中)問と為し、或いは葉囊を携帯し、著蔡(著龜)もて医卜を為し、或いは馱伝使をやつたり星占の家となり、或いは僧侶・道士となり、或いは乞巧となり術を施したり、或いは江西・皖(安徽省)との境界付近で情況をさぐり、時には突出して出て焼き討ち略奪し、持ちこたえ年を越えていた^⑤。龔鼎孳はこのときは南京に行つており、色里に出入りし、名妓顧媚と婚姻を約束した。顧媚、また眉と名乗り、字は眉生またの字は眉莊・横波といい、萬曆四十七年十一月初三日(1619.1.28)生まれ、康熙二年七月十五日(1663.8.17)死亡^⑥。彼女は崇禎年間、秦淮の名妓であり、文史に通じ、詩詞を善くし、曲に合わせ歌うのが工みであり、自由に蘭を描くことが

できた。崇禎十年(1637)冬、彼女は李香・王月ら水墨の名手たちと挙って、揚州の名士鄭元助が各地の画師を南京に招致して結成された蘭社に参加するように招かれた。蘭社は定期的に大会を開き集まり、社友たちは自分の佳作を展示し、相互研究し評議した。これは明末画壇上の盛会であった。崇禎十三年(1640)正月、龔鼎孳と顧媚とは彼女の画像の絵に詩を題し書き婚約の契りとした。龔鼎孳の詩に

腰妬楊枝髮妬雲 腰 楊枝を妬み 髪は雲を妬む

断魂鶯語夜深聞 断魂鶯語 夜深くして聞く

秦楼應被東風誤 秦楼 応に東風に誤らるべし

未遣羅敷嫁使君 未遣羅敷をして使君に嫁がしめず

と詠じ、顧媚は

識盡飄零苦 而今始得家 識り尽くす飄零苦なるを 而今 始めて家を

得たり

燈煤知妾喜 特著兩頭花 燈の煤も妾の喜ぶを知り 特に著く兩頭花

と応じた。^⑦

崇禎十四年(1641)秋、龔鼎孳は三年ごとの官僚考査(大計)が抜きんでており、吏部の推薦で召見される(行取)で入京した。十五年(1642)春、彼は兵科給事中の地位で察理畿南広平(府知の所在は今の河北省永年城関)などの職務を受命し、遍く州縣を歴て、地方の形勢を詳しく観察し、政治理念を規格計画した。およそ一年で復命し北京に帰朝した。崇禎十六年(1643)、彼は顧媚を娶り妾とした。顧媚は龔鼎孳との結婚後、徐と改姓し、字は智珠、龔鼎孳は彼女を「善知君」と呼んだ。龔鼎孳は青年時代は諫言を担当する職位(言路)において、風紀法度を監察(風憲)することを標榜するのを好んだ。当時、大学士・周延儒は呉姓と仲悪く、呉姓は「士気を尚ぶ」^⑧(尚聲氣)の人で、龔鼎孳と

給事中・曹良直とは二人とも呉姓についた。「鼎孳日々呉輔姓の門に趨き、自分でも呉姓に侍ることを「率ね以て常と為」^⑨した。二人とも「険刻」で、閣臣で背後から人を手繰ろうとするものがあれば(后台)、更に「日々羅織(罪状を暴く)を事とし」、「早朝するに遇うごとに、則ち大(官)僚より台諫(御史)に至るまで、咸な嘖嘖として耳に付き、或いは「曹は某某を糾(弾)せり」と曰ひ、或いは「龔は某某を糾(弾)せり」と曰い、皆之を畏れること虎のごとし」^⑩であった。龔鼎孳が兵科にあつて十ヶ月、先後して内閣主輔・周延儒や陳演などの人を強く弾劾した。周延儒は弾劾され職を罷め「旨を奉じ放帰せら」れた。「(周)延儒、行くととき、鼎孳遠きより(見)送るに、輿前に僂僕にして、其の測りがたきこと又此くの如し」^⑪と。以後、龔鼎孳はまた「政本と安危に關係し、已に誤れば容に再び誤り疏すべからず」と上奏し、努めて「原の大学士・王応熊が周延儒に結託して、再任を求めはかり、まさに要地を本として突然にひそかに推薦任用しようとする事」を弾劾し、(王)応熊が勢力を得て再起するのを阻止した。しかし、この年陰曆十月七日、却つて龔鼎孳は「故の主輔・陳演、貪臣を庇い国を誤る一疏に參論して、冒昧(軽率)にして当る無きを以て」^⑫、逮捕され獄に下された。崇禎十七年(1644)二月、彼は陳演の手を経て救済され釈放された。

李自成が北京を占領した後、龔鼎孳は投降し、直指使に任命された^⑬。北城を巡視した。当時、諸の降臣たちは権勢者にとり入り出世(攀龍附鳳)しようとする心が切実であり、曾て李自成に対し周鐘(介生)により作成された『勸進表』^⑭が伝えられている。その中には「杞を存し宋を存す」という一文があるのは、小国の祭祀を保存する方法で明朝王室問題を処理することを建議した。龔鼎孳はとくとくと人に「此の語は吾

が手より出でたり、周介生此に想い至らず」^⑮と喋っている。けれども李自成の起義が失敗の後、彼はまた顧媚を言い分けにして釈明し「我原より死せんと欲するも、小妾（顧媚）の肯んぜざるを奈何せんや」^⑯と。後の弘光朝廷では欠席裁判で彼を「真つ先に降参附表せるは、宜しく斬すべし」^⑰と判決する。

順治元年（1644）五月、ドルゴンが北京を占領し、龔鼎孳はまた降つた。彼はまず故の明の原官で兵科給事中に任命され、続けて吏科右給事中に昇任され、後に礼科都給事中に昇進した。彼は昔、「条上江北善后事宜疏」等の疏を上り、「百姓を撫綏」「征徭を蠲免（免除）」「民の害を消弭（消除）」などを建議し、八旗兵の略奪の害をずばりと指摘し、「凡そ師を駐する處所、つとめて宜しく紀律を申明にすべし、草木は略する無かれ、略奪を禁じ、取引は公平にせよ」^⑱と要求した。

順治二年（1645）七月、清朝では大学士・馮銓の被弾劾事件が発生した。馮銓は明の閹党の重要人物であったが、弾劾するのは同じく明の東林党・復社につながりある南方の漢人官僚とその追隨者であった。これは明末の党争が清王朝にも及んだ明らかな反映である。八月、ドルゴンは科道（六科給事中）の官僚たちを集めて詰問した。龔鼎孳は南方の漢官の立場を支持し「銓の閹党を斥くるは、（魏）忠賢の義理息子だからである」とのべた。馮銓は反って嘲り言うには「逆賊の御史を何如せん？」^⑲「鼎孳は魏徴の（唐）太宗に帰順するを以て自ら解せり」と言った。ドルゴンは非常に反感を抱き、笑って「惟だ瑕無き者のみ以て人を戮すべし。奈何ぞ闖賊を以て太宗に擬せんとは！」^⑳と言った。九月、龔鼎孳は太常寺少卿に左遷され、言路から外され転属された。これ以後、ドルゴンの摂政期間（1644～1650）ずっと、彼は政治上ではもう勢いを盛り返すことはない。

順治三年（1646）六月、彼は「父の憂に丁ひ、恤典を賜はるを請」うた。工科給事中の孫珀齡は龔鼎孳を厳しく弾劾して「酒を飲み酔って歌ひ、俳優も角逐す。前に江南に在りしとき千金を用いて妓を置き、顧眉生と名づく、恋恋として割きがたし。多く奇寶異珍を以て其の心を悦ばしむ。淫縦の状、長安に哄笑せらるるに、已に其の父母妻孥を度外に置く。父の訃（報）を聞くに及び、歌い飲み留連し、依然として故の如し。行に虧け倫を滅するに、獨り非分の典を邀えんと冀ひ、郷里に耀やかさんと誇り、大いに其の武断把持の焰を肆いままにせんと欲す」^㉑と、疏文が上つられ、二級降格が決定されて配置換えとなる。恩詔に遇ったことにより免れ、九月、彼は原官に補充せられた。

龔鼎孳夫婦は弾劾される上疏文中に名が掛かったままで帰郷したので、心鬱いで安らかでない彼らの怨望は想像できよう。このため、以後数年間、喪を守ることを借りて江南に滞留した。郷に過ぐす以外、彼はやはり南京・鎮江・蘇州・揚州・杭州など景勝地に出かけ遊び宴会し、顧夢游・鄧漢儀・陳維崧・紀映鍾・杜浚・姜琛・曹溶・吳綺・余懷・冒襄などの文人墨客と詩酒の会をもち、服喪の期間であったけれども、妙舞清歌は止めることはなかった。この時、顧媚は結婚してすでに時がたっており、「百計もて嗣を求むるも卒に子なく、甚だしきに異香木を彫りて男子となし、四肢も動き、錦織で襦袢を作り、乳母を雇いて懐を開き之を哺くましむ。保母褰襟もて便溺状を作る。内外小相公と称せり。龔もまた禁ぜざるなり」と。これらの行為は非常に物議をかもし、龔鼎孳夫妻は当時西子湖畔に寓居していたので、「杭（州）人は目して人妖とした。」^㉒

中年に歩みいると、龔鼎孳は「清流」となり、悪名を洗い流そうと想ったようだ。順治八年（1651）夏、彼は都に戻り原官位で復職した。

後には、彼は文思構想が敏捷で、才知も優れて皇帝の賞識を得た。順治帝は彼を嘆賞して「龔某は筆を下せば千言立地に成りて思索を仮らず、眞に当今の才子なり」と述べたということである。

順治十年(1653)四月、彼は刑部右侍郎に昇進する。彼は刑部の事宜(按排・処理)は、「折獄(判決訴訟案件)は情を得るを貴ぶなどの七事に帰納し、「満人を貴び漢人を軽ろんずる政治的傾向に対して婉曲に「是れ何ぞ満(人)司官(主管官員)の獨り勞して漢(人)司官の獨り逸なるや?今より以後、一切の獄訟は先ず満・漢司官の公同(共同)して質訊するを請ふ」とした。

順治十一年(1654)二月、彼は戸部左侍郎に改められ昇任した。五月、都察院左都御史に昇進した。この期間、龔鼎孳はかなり諫言を敢行し、上訴して投充(権勢家の庇護)に反対し、搜捕中に誣告し詐をでっち上げる害などに反対した。

これにより、彼は仕途上においてまた挫折に遭遇するのは免れ得なかった。順治十二年(1655)十月、彼は都察院にあつて司法が各案件を審議するのに「龔鼎孳は」往々にして倡へて別議を為し、若し事の満州に系はれば則ち満議に同じ、律を重んじるに附会し、事の漢人に涉れば則ち多く両議を出だし、曲げて寛状を引く」と、執法中、漢人に偏向し「心を尽くして国に報ゆるを思はず」とされた。彼は八級も降下され配置換えを受けた。十一月、さらに彼は推挙されるに併せて都察院考准であつた順天巡按顧仁により貪汚で死刑に処せられることにより、また三級降下され配置換えを受けた。順治十三年(1656)四月、彼は左遷されて上林苑藩育署長官(苑丞)となった。順治十五年(1658)「復た屢屢謫せられ国士監助教に至る」まで下げられた。十八年(1661)二月、継母の死亡に丁い、彼は詔によって在任のまま喪に服した。

中年時代の浮沈を経過し、龔鼎孳はさらに老練さと滑らかさと加え、奏疏中にもう政治上の先鋭な問題を提出しなくなった。このことによつて、彼の晩年は順風満帆であつた。康熙二年(1663)六月、服喪が終わると彼は再度また左都御史に当てられた。この後、彼は転遷を続け、次年十一月には刑部尚書に改められ、五年九月には兵部尚書に遷り、八年(1669)五月に禮部尚書に転じ、併せて九年(1670)・十二年(1673)には二度会試主考官に任ぜられた。しかし、彼は刑獄についてはやはり慎重な態度を持ち、「豪も疑を發すること有れば、必ず推駁尽きるを致さしめ」た。その他、才能ある人物を選抜することについて彼も非常に関心が高く、「兩典の会試、英雋を汲引すること(誰も)及ばざるが如し」であつた。

龔鼎孳は声色を好み、たとい逆境中であろうとも、なおハデさや豪奢を愛した。順治十三年(1656)、彼は「苑丞」に降格されても次の年に十一月初三日、彼は南京で顧媚のために誕生日祝いを行い。人を迎えて「王母瑤池宴」を上演させ、文人や顧媚と旧時同輩であつた妓女数百人を宴会に呼んだ。平時でも賓客朋友は引きも切らず彼に招かれた。芸人の王紫稼・柳敬亭などが都に旅遊上京すると、彼のところに身を寄せた。

彼は広く文士たちと交友し、多くの遺民たちが彼の援助を受けることができた。易堂九子の一人・曾燦は「外侮に遭遇してより、公の始めて解さしを得」たのであつた。遺民の「傅山・閻爾梅が獄に下されたとき皆彼の力に頼り免れることができた」。幾多の人は彼の援助により生活し、葬儀までをきりもりした。遺民詩人・杜浚は何時も飢餓線上でもがいており、龔鼎孳はいつでも救済した。杜浚は彼のことを乾燥しきつた早苗をちよど潤す慈雨と見なし、「知己龔先生」と称賛した。杜浚の

ひとり娘の許嫁である字が太倉の葉洞初というものは、貧しくて娶ることができなかつた。龔鼎孳は先ず銀三十兩を婚礼費用とするように渡し、後からまた自分自身、人に托し婚事を取り計らうようにさせた³¹⁾。

遺民「王子雲亡き後、龔（鼎孳）大司馬は手紙と資金を寄せて、お申咄いさせた。「朱彝尊・陳維崧ら京師に游するに、貧しきこと甚だしく、之に資給せり」と。龔鼎孳も「真に能く才を愛し、詩文を以て見はれし者あらば、必ず其の名をして時に流布せしめんと欲す、又其の才品の高下に因りて之を次第す」と。故に彼の影響はずつと非常に大きかつた。「康熙の初、士人は詩文を手挟みて京師に游し、必ず龔端毅（鼎孳）公に謁せんとす」と。「士の帰往するもの宇内に遍し」と。彼が身罷る時でもやはり詩人・徐鉉のことを梁清標にことづけ、深い思いを抱きながら「徐鉉）才を負うこと虹亭の如し、之をして名を成さしめざるべけんや」と。

康熙十二年（1673）九月、休職退任を許された。病死の後、清朝廷は葬祭を許し、「端毅」と諡した。乾隆三十四年（1769）、其の諡を奪うように詔した。

龔端毅の著作は非常に豊富であり、『蝶唱集』などが亡逸したほかは、『山聲堂集偶存』（『浣川政譜』とも題される）・『龔端毅公奏疏』八卷・『定山堂文集』六卷・『定山堂小品文』二卷・『定山堂詩集』四十三卷・『定山堂詩餘』四卷がある。彼の詩詞は宴会応酬の作品が多く、このことは彼の生活内容と態度との反映である。但し、少数の作品にも多少は民の生活についての関心配慮を表現している、例えば³²⁾

萬方唯正供 悉索亦以疲 万方もて唯だ正しく供し 悉く索め亦た以て
疲る

新餉五百万 剝肉療飢羸 新餉五百万 肉を剝ずり飢羸を療す

國計在本地 毛附先存皮 國計 本地に在り 毛は附され先ず皮を存す
民困必失所 拯溺焉能違 民困しみて必ず所を失ふ 溺れしを拯け 焉
くんぞ能く違はんや

また、次の七言長詩³³⁾

荒村哀寡婦哭 荒村哀哀として 寡婦哭き
山田瘦尽無耕農 山田瘦せ尽き 耕農なし
男逃女竄迫兵火 男は逃げ女竄る 兵火に迫られしに
千墟萬落倉箱空 千墟万落 倉箱空し

彼の七言絶句は清新で秀れて美しい。梅花詩一首³⁴⁾は次のようである。

天涯疏影伴黄昏 天涯疏影 黄昏に伴なわれ
玉笛高楼自掩門 玉笛の高楼 自から門を掩ふ
夢轉乍驚身是客 夢転じ乍ち驚く 身は是れ客なるに
一船寒月到江村 一船 寒月 江村に至る

また一首、「上巳將に金陵を過らんとす」³⁵⁾詩は

倚檻春愁玉樹飄 檻に倚り 春愁ひて 玉樹飄る
空江鐵鎖野烟銷 空江の鉄鎖 野烟銷ゆ
興懷何限蘭亭感 興懷何ぞ限らん 蘭亭の感
流水青山送六朝 流水 青山 六朝を送る

彼の文章は非常に佳作が多い。令柬・帖の類でも、心情までも表現されて現れ、おのずと作文の名人と云えよう。

原注

①李遜之…『三朝野記』卷四「崇禎朝（丁卯九月より庚午十二月に至る）」。

②李清…『三垣筆記』中、「崇禎」、中華書局1982年版 53頁。

③ 閔爾昌輯・『碑傳集補』卷四十四「文学」一、嚴正矩「大宗伯龔端毅公傳」。(中文出版社影印版三六四五頁・訳者注)

④ 鄧琛等・光緒『黃州府志』卷之四、「建置志」城池。

⑤ 計六奇・『明季北略』卷之一五、「崇禎十二年己卯」「323賊間」、中華書局1984年版、二七一頁。並びに谷心泰『明史記事本末』卷之七五「中原群盜」、中華書局1977年版二二九四頁。

⑥ 孟森・『心史叢刊』(二輯)「横波夫人考」に次のように云っている。

「横波夫人が亡くなったのが康熙三年(1664)甲辰の年だとして分かるのか? 『定山堂集』の壬寅(1662)から丙午(1666)までの詩稿に「送李素臣(孝廉)歸八寶(應)」詩(定山堂集・卷十三)があり、その当時すでに南宮(大学)の俊才もいなくなり、ちょうど亡きものを悼むに際し、聊か同病の感の一律詩を記した、と。康熙壬寅(1662)から丙午(1666)まで、甲辰(1664)の年だけに会試が行われ、李が及第せず(帰郷を)見送り、妻を悼亡するのを、自分を同病と云っているのは、龔鼎孳の悼亡も必ずその時であった。『東華録』

康熙三年(1664)四月丙戌の日、嚴我斯等一百九十九人の進士が及第するも出身に差(くいちがい)があり、李の不合格の報せはおのずと春夏の間であった。ただ李を送る詩は必ずしも会試合格発表に迫っていた訳ではない。後の詩の記録に拠れば、顧横波の忌日の法事(読経)は中元であったので、ちょうど必ずしも七月十五日であったのではないが、要するに秋の初めであったはずである」と。董遷の『龔芝麓年譜』は、康熙二年癸卯(1663)「秋七月、顧夫人京邸に卒す」と定めている。また閔爾梅が康熙五年(1666)に作った「桃花城挽詞」第四首に自注して「(横)媚は七月十五日を以て終る、今七月十五日恰も巳に三年なり」とある。『中和』月刊第三卷第二期71頁、1942年

二月出版。原詩は閔爾梅『閔古古全集』卷三(『白香山詩』南直隸集・「桃花城挽辞」(十首)に掲載され、注文に「眉は七月十五日を以て終る、今七月十五に至るまで恰も三年なり」とある。)董(遷の『龔芝麓年譜』は正しい。というのは康熙三年七月十五日より康熙五年七月十五日までなら、おそらく「恰も三年」とは云えないから。このほか、孟(森)の「李を送る詩は会試結果発表に必ずしも迫っていなかった」というのも根拠がないのだ。どうして必ず七月十五日の後で合格発表が間近であるときできないとする必要があるのか。顧媚が康熙三年死亡したことの根拠を探し求めただけのことであろう。實際上、結果発表後の落第者の送別がなされたのは、顧媚が亡くなってまだ一周忌ではなく、丁度悼亡の時期であり、このように考えれば更に合理的であろう。

⑦ 陸以活・『冷廬雜識』卷七、「顧横波小象」、中華書局1984年版、三八六頁。

⑧ 注②と同じ、52頁。

⑨ 注②と同じ。

⑩ 注②と同じ、53・54頁。

⑪ 注②と同じ、66・67頁。

⑫ 龔鼎孳・『龔端毅公奏疏』附卷「衰病殘軀不能供職謹補陳情乞恩允放啓」。

⑬ 錢邦苕・『甲申忠佞紀事』。錢駟『甲申傳信錄』卷五「槐國衣冠」・「直指使」、計六奇『明季北略』卷之二二「從逆諸臣」・「龔鼎孳」、『清史稿』卷四八四(「列傳」二七一、「文苑」一「龔鼎孳」と同じ。しかし、文秉『烈寇小識』卷八・彭孫貽『流寇志』卷一「一などすべて「庶吉士」に任ずと云う。馮銓がドルゴンの面前で龔鼎孳を「逆賊御史」

と罵ったことから見ると、自ずと「直指使」が正しいことになる。

- ⑭ 清初では、このような伝説は非常に盛んであった。ただし、趙士錦『甲申紀事』・古藏室史臣『弘光実録鈔』など異説もある。趙士錦は「賊中勸進する者、皆(劉)宗敏・(牛)金星・宋企郊等なり、未だ(周)鐘の「勸進表」を撰するの事有るを聞かず。弘光の時、(周)鐘「勸進表」を撰せりと詐り伝へられ「堯・舜に比して武功多く、湯武に較べて徳に慚じる無し」などの語あり。予(趙)の南下せし時、闖賊自から告示を各府州県に張り、果たして此の二語あるを見るに、議するもの乃ち鐘の撰するところと為すは、乃ち冤なからんや。」(中華書局1959年版19頁)。古藏室史臣は且つさらにデマを造った者をさがし出し、(周)鐘は「大逆の尤」などと色々な言い方をするのは、「則ち其の郷人・徐士森の造りしところとなる」と述べる。史臣はさらに徐士森が謀を蓄え(周)鐘を誣蔑する原因であると分析している。
- ⑮ 計六奇・『明季北略』卷之二二、「從逆諸臣」周鐘、中華書局1984年版六〇六頁。
- ⑯ 計六奇・『明季北略』卷之二二、「從逆諸臣」龔鼎孳、中華書局1984年版六三二頁。
- ⑰ 彭孫貽『流寇志』卷一三、浙江人民出版社1983年版二二五頁。
- ⑱ 龔鼎孳・『龔端毅公奏疏』卷一、順治(甲申十一月より癸巳)(1653年)五月まで。「條上江北善后事宜疏」。
- ⑲ 『清史稿』卷四八四(「列傳」二七一、「文苑」一「龔鼎孳」)、中華書局1977年版第四四冊一三三三三五頁。
- ⑳ 『清史列傳』卷七九(「貳臣傳」乙、「龔鼎孳」。「孫珀齡」をもと「孫昌齡」と書くのは、『清世祖實録』卷二六第12頁・『明清進士題名碑録索引』(上、五五五頁)を検証すれば、「昌」字が間違いであると分かる。
- ㉑ 余懷『板橋雜記』卷中「麗品」。
- ㉒ 閩爾昌輯・『碑傳集補』卷四十四「文学」一、鄭方坤・『三十二芙蓉齋詩鈔小傳』。
- ㉓ 龔鼎孳・『龔端毅公奏疏』卷二、順治(癸巳)1653五月より甲午1654年八月まで、「遵諭陳言疏」。
- ㉔ 同前書卷三、順治(甲午)1654十月より辛丑1661十二月十五日まで、「明白回話疏」。
- ㉕ 同前書卷四、康熙(癸卯)1663二月より癸丑1673九月まで、「請賜罷黜疏」。
- ㉖ 王暉・『今世說』卷二「政事」、古典文学出版社1957年版22頁。
- ㉗ 注⑲と同じ。
- ㉘ 曾燦・『曾青黎詩文集』(「六松堂詩文集」)卷六「七言律」「奉呈大司寇龔芝麓年伯賜假歸里」其三自注。
- ㉙ 同注⑲。案するに、世間では閩爾梅が禍に罹った際、顧媚が彼を側の部屋或いは腹壁に隠して免れたと伝わっている。張相文『白畚山人年譜』(中)では、それが間違いであることを已に断言して「此は則ち無稽なること甚だし」と云う(丙午1666永曆二十年の条)。但し未だ証拠を擧げていない。實際上、閩爾梅は康熙二年1663仇家から引き留められ、康熙三年1664亡命して昌平州に至り、次いで宣府から出て山西に行き、康熙四年1665十二月京師に潜入し、寺廟や僧庵に隠れ住み、龔鼎孳に援助を乞うた。龔鼎孳の題疏で免れることができた。このとき顧媚は已に死亡しており、彼女の部屋の腹壁や隣の部屋に蔵すのは決して不可能である。以下に証拠となる閩爾梅の詩がある。閩爾梅「龔孝升九日懷を見はす詩を読み感あり(序あり)」序に云う

「都に入り孝升の大同寇に晋むを聞く、兇兇云う「吾が家の大禍は此の公（龔鼎孳）解かざるに非ず、且つ刑部其の職掌を正せり」と。即ち（名）刺を投じ往謁す。公駭然たり。……蓋し爾る時尚お未だ敢えて余（閻爾梅）の都に入りしを明言せざるなり。感じて之を志るす」と。詩に云う・

僧窗紙碎朔風侵 僧窓紙碎け 朔風侵す

夜苦更長昼苦明 夜 更に長きを苦しむ 昼明るきを苦しむ

逃禪猶恐累山林 逃禪 猶お恐る 山林に累はさるるを

同郷連座人何罪 同郷連座するは 人何の罪かあらん

烈婦無言我愧心 烈婦も言ふ無く 我が（慚）愧の心

聞道尚書仍念舊 聞道きくく 尚書仍お旧を念ふと

歛場悽咽有微吟 歛場 悽いたみ咽なくに 微吟あり

（『閻古全集』巻四「白奩山人詩」七言律・北直隸集）名前が補籍の罪人名にあるのを隠したのは首を切られるからである。顧媚は閻爾梅を匿ったという誤伝が生まれたのは、恐らくは彼ら夫婦を高く見積もりすぎたのであろう。

③① 杜浚・『變雅堂集』巻九「詩」九、七言絶句「今年貧口号（二十四首）之十四。

③② 夏荃・『梓里旧聞』巻七「柳敬亭」。鄧漢儀『慎墨堂筆記』にも記録あり。案ずるに、葉桐初という名は尤侗『良齋倦稿』巻九「壬申雜文」序「惜樹詞序」より検証。

③③ 顧景星・『白茅堂集』巻之一四「戊申（康熙七年）」「和澹岩哭王子雲韻」。

③④ 注①⑨と同じ。

③⑤ 沈德潜編・『清詩別裁集』巻一龔鼎孳。

③⑥ 王士慎・『香祖筆記』巻八、上海古籍出版社1983年版百五十頁。

③⑦ 注③④と同じ。案ずるに、かなりの前王朝・明の遺民と清王朝の士大夫は往々にして龔鼎孳の政治上の変節に対してとりわけ諒解をし甚だしくは辯解の態度も持した。たとえば閻爾梅は龔鼎孳が李自成に投降したということについても次のように（律詩に）記す。

…………… ……

有懷安用深相愧 懷ひ有りて安くに用いんや 深く相ひ愧じるに

無路何妨各自行 路無くして何ぞ妨げん 各自おの行くを

元直曾云方寸亂（徐）元直曾つて云へり 方寸乱れりと

子長終為故人明（司馬）子長終に故人の為に明かにす

（『閻古全集』巻四「白奩山人詩」七言律・南直隸集「答龔孝升五首時自都門南下以詩投我」）この所謂第五句がつまり「元直曾云方寸乱」という句である。この句は次のように云う・「まるで徐庶（元直）が老母のために漢王朝（劉備）に忠を尽くすことを願わず曹操のもとへ身を投じたのと同じように、龔鼎孳の両親が健在なので、自分を留め親孝行を尽くすために忠を尽くして殉死するのを願わず、農民軍（李自成）に投降することができた」と。一方、閻爾梅自身は一旦

李陵が匈奴に投降したことを弁護した司馬遷に扮して、龔鼎孳のなした行為のために心根を解明し、解釈を作った。計六希も次のことを認めている。龔鼎孳たちの「不死」は、「君子猶お当に其の志を諒とすべし」（『明季北略』巻之二二「從逆諸臣」魏學濂、中華書局1984年版六一一頁）。そして顧景星は龔鼎孳のことを「感恩知己」と称えて、「人倫の鑑」と賞賛し、龔鼎孳に対し「存没感恩」であった。（『白茅堂集』巻之六「丁亥（順治四年）『存歿感恩詩（有序）』」。龔鼎孳の投降行為に関して顧景星も龔鼎孳自身の解釈にもとづき弁護をし、さら

に方以智を引き出して証拠立てて、方以智の「言は龔鼎孳と合す」と述べている(『白茅堂集』卷之一三「乙巳(康熙四年)『和龔公憶方密之詩(有序)』)。孟森は見極めていずに、顧景星が詩をつくり龔鼎孳を諷刺したと考えたが、実は誤解であった。(注⑥に挙げた孟森の文「横波夫人考」を参照。)

③⑦注⑬と同じ。

③⑧顧景星によれば、龔鼎孳は「粵(広東省)に使ひするに、『過嶺集』有り」と記している。(『白茅堂集』卷之一三乙巳(康熙四年)「正月十四日海虞旅次、合肥公(龔鼎孳)を懐ふ」)『過嶺集』は今未見。おそらく後に『定山堂集』卷一などの卷「五言律詩」・卷二五などの「七言律詩」に編入されたと思われる、すべて「順治丙申(1656)粵に使いせしに康熙辛丑(1661)まで邸舎の稿」と注し明らかである。

③⑨龔鼎孳・『定山堂詩集』卷二、「順治癸巳(1653)仲春より康熙壬寅(1662)以後までの稿」「五言古詩」二「辛丑(1661)十二月十九日恭誦詔諭盡錫新加練餉感恩紀事因賦蠲租行二首追同元次山春陵行韻(栢郷中丞の請に因るなり)」。当然、本詩の主旨は皇帝を頌えるものである。

④⑩沈徳潜編・『清詩別裁集』卷一龔鼎孳「歲暮行(用少陵韻)」。龔鼎孳・『定山堂詩集』卷四、「順治癸巳(1653)仲春より康熙壬寅(1662)以後までの稿」「七言古詩」二「歲暮行(用少陵韻)」は、字句に遜色があつて、「荒村葉落寡婦泣……十年不見旌旗空」となっている。

④⑪龔鼎孳・『定山堂詩集』卷二九、「順治丙申(1656)粵に使いせしに康熙辛丑(1661)まで邸舎の稿」「七言絶句」四「百嘉村見梅花」其二。

④⑫同前書卷三九、「上巳將過金陵」其二。

B 周亮工伝(『清代人物伝稿 上編 第四卷』250-256頁)

許敏

周亮工、字は元亮、また字減齋、投庵といい、明の萬歴四十年四月初七日(1612.5.7)生まれ、清の康熙十一年六月二十三日(1672.7.17)病逝した。彼の先祖は周匡、宋時代は江寧に居り、後に江西金溪麻山・樸下などの地に家を移した。彼の祖父庭槐の時になって、家を挙げて北方河南に遷り、祥符(現在の河南開封市)の籍を占めた。それ故、亮工は河南祥符の籍に属し、江西金溪人である。彼の父親周文煒、字、赤之は監正となり、胙城王の朱朝瑄の娘を娶り、南京に遷った。周亮工は南京に生まれ、後には南京で病死する、それで、彼は南京に非常に深い関係がある。祖父の代が樞下に最も長い間住んでいた、彼はそれで樞園と自ら号し、当時の学者もみな彼を樞下先生と称した。

彼は読書人の家柄の出身であり、五歳で教え導かれ、八歳で朗々と經典を暗唱でき、聡明で才能豊かなことが現れている。天啓三年(1623)、周亮工は父に随い浙江に着き、西湖に船上に浮かび、五泄湖^①に遊び、抱負を広げ、智慧を啓発された。父・文煒は諸暨県の主簿(書記)という軽微な職務でありながら、庶民の利益を保護し上司と抗争することができ、上司には寛容されなかつたので、二年でもう左遷された。周文煒は辱めを受けることに我慢ならず、怒って衣を払って帰った。これから周亮工の暮らし向きは没落した。父親の失意によって周亮工は早くから人世の苦難を目の当たりにし、自ら激励して経史を苦読するのに打ち込み、功名を勝ち取る道を歩む。

南京に返つて後、周亮工は書物を手から放すことはなかつた。先生に従うのほかに彼は広く朋友と交わり、高阜・羅耀・周敏求・盛于斯などと切磋琢磨した。彼は詩文の浮誇の風気に反対し復古写実を主張、名声

が一時に揚がった。余姚の黄宗義・桐城の呉道凝・南昌の陳弘緒や艾南英などの名士たちと、周亮工は手紙をやりとりし、友情を結んだ。彼と黄宗義・呉道凝らは一緒に江南名士呉騂（衆香）が始めた星社に参加した。当時の士大夫の結社は、交友を結び知友となり共に時事を討論するのが主要な根拠の一つである。黄宗義と呉道凝・呉騂との二呉とともに復社の中堅で、周亮工は彼らと交友して、彼らの政治改良の要求の進歩的思想の影響を深く受けた。

当時の慣例では、南北の官吏登用試験場はそれぞれ本籍の士子を収納し受験させる。周亮工の祥符の本籍は彼の科挙受験中の足柳となり、これは南京で幾度も受験して合格しなかった。崇禎五年（1632）、彼は父に随い伯母さん（周家長女）を見舞いに行き、そこに留まって受験することに決めて、祥符県の挙人・張林宗の家に家塾を開いた。祥符県令である孫承澤はとても早く周亮工の才識が群を抜いており、非常にお眼鏡に叶い、特に寄付して彼のために田地を買入れさせてやった。この時、甘んじて家塾に暮らしていた周亮工は春風が暖気を送って来るかのように「平疇 春雨足り 八口 笑いて相牽く」^②のであった。彼は感激の情で満ちていた。次の年（1633）、彼は県府試験中第一位で生員となった。崇禎十二年（1639）、周亮工は郷試に合格し、その翌年（1640）進士に合格した。十四年（1641）、彼は山東の濰県（現在の濰坊市）知県に選任された。

崇禎十五年（1642）、清の阿巴泰が兵を率いて南下し、濰城を囲み攻撃した。周亮工はよくその職責を尽くし、軍民を指導して死守し、危機に瀕した濰城を保った。人民は彼に感謝し彼のために生祠を立てた。周亮工も自分で『全濰紀略』を作った。崇禎十六年（1643）、彼は「廉卓」（清廉卓出）であることで浙江道試御史を授けられ昇進した。翌年北京

に赴き赴任した。ただ、赴任後十日もせずに、李自成が京師を攻め落とすし、明朝は滅亡した。周亮工は機会に乘じ南方に逃れ弘光政権に投じた。しかし、弘光政権の腐敗が堪え難いのを目睹して、毅然として政権を離れ去り、南京郊外の牛首山下に隠居した。

順治二年（1645）、清の軍隊が南下し、周亮工は降伏した。清朝政府は彼に兩淮塩運使を授けた。順治三年（1646）、淮揚海防兵備道参政に昇任した。四年（1647）、福建按察使に抜擢された。

周亮工が福建にいた八年間、彼の官界途中での春風満帆の得意の段階であった。当時、閩地方は平定したばかりで、ただ抗清武装集団と農民一揆がまだあちこちで起こり、ちょうど盛んになり始めてであった。周亮工が福建に入る際でも、道路が塞がれ、まずは光澤・邵武県にとどまり職務に当たった。邵武で彼は計画して叛乱軍將軍熊再法・秦登虎ら三千の人馬を誅殺し、大いに声名を振った^③。順治五年五月（1648）、彼は福州に到着し福建按察使として兵備・学校・海防を取り仕切った。六年（1649）、福建右布政使に昇任した。七年（1650）、彼は汀南道を代理して「至れば則ち恩威互いに用」^④い、迅速に上杭（福建省龍光地区）の會省を首とした地方武装勢力を平定した。八年（1651）、単騎で反乱軍首領・耿虎^⑤を招撫し、後続けて建寧の陳和尚や延平の白蓮教徒が集まった呉賽娘の軍隊^⑥などを鎮圧した。「凡そ閩疆に萑苻（多盜）の警あらば、即ち以て委署せし」めて周亮工も「惟だ命是れ馳せ」安堵させないことはなかった。九年（1652）、鄭成功が部隊を率い漳州を侵攻し、数ヶ月街城を囲んだので、官府側は意気阻喪した。巡撫・張學聖は急いで周亮工を轉務させ守備に往かせ、彼は檄文を奉じて漳州に入り、街の城壁を修理し、軍需品を集め、抵抗戦を進行し、そのまま囲みを解放した。順治十年（1653）彼は興泉道を職務代行した。当時、泉州沿岸の海

村落は、鄭成功を助けて兵量と資金を供給するところが多く、浙閩総督・劉清泰は軍兵を集めて準備し進んで討伐しようとしたところ、周亮工は阻止につとめ、数十万人を塗炭の苦しみから救った。夏、左布政使に転じた。数年間に彼は閩地方の疆界を遍く歴訪し、民間の疾苦を委細承知しており、このため政治を司る一方地方民の生活を巡視して回り清廉で法に適う政治を力めた。彼は奸佞の役人を駆逐し豪強を取り除き、流民を安撫し、耕作を奨励し、部下たちにも慈悲をモットーとし、まきあげ搾取る悪弊を禁じた。彼は役所内前面に警告の御札を立て、県役所の軍費は必ず必要が来たら調達するようにさせ、徴収は銀の余分徴収を厳禁し、発給はもとのそのままであるようにさせ、人民に徴税の苦しみをようやく緩和させるようになった。周亮工の文教政治と軍事上の功績により、清朝の南方に対する統治が強化され、彼はそれによって統治者の高い評価に預かった。十一年(1654)、都察院左副都御史に抜擢され転任を命じられ上京した。

周亮工は抜擢を受けたので、清朝に対し非常に感激の極みであった。上京後も間もなく上奏して、更に進んだ福建平定方策を提出し、用兵の機敏さがある六方策を用いるべく継続し献策し、防備を強化するように「海軍を増設」、「鄭芝龍を斬り、鄭成功を招撫するのを止め」て、武力で鄭氏を討伐すること等を建議した。これらの意見は清朝に非常に重視された。十二年(1655)、彼は又戸部督錢法右侍郎に選拔され昇任した。七月、新任の浙閩総督・佟代が彼に対し弾劾をし、そのため彼の昇進は阻まれた。もともと、周亮工が福建で按察使を任じていたとき、当地の武科拳あがりの王国弼と貢生たちは多くが南・西・蘭社などの結社を始めていた。周亮工は彼らが結党し私利を貪り、奸事をなし犯罪を犯すので、彼らを鎮圧した。周亮工が退任して去った後、それらの貢生や親

しい者たちが次々と総督佟代に文書を差し出し上訴して、無実を申し立てた。当時、清朝政府はすでに地方で影響力をもつ士紳たちを安撫するように注意するようになっていた。佟代本人と周亮工にも個人的な心証の行き違いがあり、このため彼は周亮工を糾弾し「君を欺き民を虐げ、大いに貪る極悪」人とした。奏上され、周亮工は免職となり、福建での審理に赴く。この告訴は何度も繰り返され多方面に波及し、攻撃する者は有罪と云い、正す者は無罪と云い両派を形成し、六年も引き延ばされても決しなかった。証言を取るために、官府は杖死者や瘦せ死亡者を多く大に出した。十七年(1660)、順治朝で勅裁され、もとの「立斬、籍没・籍減」(ギロチン・財産没収減殺)等に応じ寧古塔(現在の黒龍江寧安)の流謫に改められた。ただ、周亮工がまだ旅途に上らぬうち、恩赦で釈放された。

弾劾の罪状に対し、周亮工は固執して認めず、さらに何時も機会あるごとに自己の誓って変わらぬ忠君の心根を明らかにした。十三年福建で審理を受けているとき、丁度まさに鄭成功軍が福州を包囲攻撃するの遭い、巡撫の宜永貴は周亮工に委ねて軍隊を率い反撃させ、周亮工はやはり全力をつくして、侵攻を撃退させた。十六年(1659)、彼は都で訊問を待つ間、自分が住居する小屋に「因樹屋」と題名し、毎日そこで詩をつくり文章を著して胸臆を叙述した。十七年、彼は逮捕下獄され判決をまつとき、自ら凶多く吉少いことを知ると間もなく印章に「又活一天」と彫り、それで達観を示した。

康熙帝が即位した後、清朝は周亮工の原案どおり「多く子虚(虚構)に属す」とし、且つ審理中国防に功績があると認め、改めて登用することになる。康熙元年(1662)、僉事の地位で山東青州(現在の益都市)海防道を授けられた。彼は心して慎み宿弊を改めようと力めた。青州の

人々は彼のために徳政碑を立てた。五年(1666)、江南江安督糧參議に遷った。当時、交運政治が崩壊しており、彼は上奏していたが、許されなかった。彼は着任後、何名かの貪吏や悪役人を懲らしめ正したが、しかし未だ積年の弊害を整理できず、反対に怨みに遭遇する。六年(1667)、新設の安徽布政使の代理を務める。久しからずして江寧糧署の職務を引き継いだ。八年(1669)、漕運総督帥顏保は周亮工を職務放縱・職務侵犯などの罪で弾劾した。彼は免職下獄され、裁かれ縊死とされた。翌年、恩赦をうけ許された。二度も弾劾を受け逮捕され、彼はこれまで官界で浮沈する味を十分に味わい尽くした。彼は意気消沈し、釈放されて後は、恣に山河に遊覧し艱難を背に担い手にささげ持った憂鬱なる心緒を伸ばした。二年後病死し、享年六十一歳である。

周亮工は天性から心が真つ直ぐで、豪壯爽快、義侠心が強い。崇禎十五年(1642)、黄河が開封で決壊したので、それ故學塾の主・張林宗の家は幼児のほか、皆が溺死する災害に遭った。周亮工はとりわけ張林宗の遺児を受け取り家で養育した。遺児が成長後には、周亮工はみずから開封に送り届け、替って土地を買い戻し不動産を買ってやり、居所も安定し仕事をし易くしてやった。南京の良友であった盛于斯が貧困で亡くなった。周亮工は力を尽くし墓を作って墓石に銘を彫りつけ、彼の寡婦の母親を落ち着いて暮らせるようにした。彼はさらに後学を奨励し昇進させることを重要視した。濰県にあっては彼は童試中から十六人を引き抜き、その中十二人が後に皆進士に合格した。彼はとりわけ人才記録簿を作り、およそ一芸に秀でるところがあれば、彼は常に記録簿に記入し、ある時は評判が遠くまで聞こえたりするとき、表敬訪問したりして、困難な場合に対して急を救い援助した。泰州詩人の呉嘉紀が海浜に蟄居し、貧しく病んで付き合ひも困難であった。康熙年間の初め、周亮

工は気前よく寄付をして、『陋軒詩』を發刊し世に広め、併せて友人に贈呈し呉嘉紀のために褒め称えた。彼はまた王猷定・秦京・王損仲・阮大沖・張林宗など多くの人のために文集あるいは合集を出版し、微を顯著に幽を表彰し、朋友たちの成就したものを埋没させなかった。

周亮工の知識は該博であり常々「朝夕一編、手批口哦」し、出仕した後「大僚に参拜し、賓客と酬訪、輿幙中に坐し往来し、市肆雑踏、猶お哀然たる十数卷を以て自ら随」った。客と宴会することに、「上下古今、旁ては山川草木、方名小物に及ぶまで、妮妮つとめあきずとして倦まず」。彼は尤も詩文を好み、たとい身は獄に下されていてもこれまで一日も吟詠を廢することがなかったため、それ故、生涯の詩甚だしく多い。彼は明の前・後七子の影響を受け、杜甫を宗として、復古を主張したが、彼らの模擬の古いやり方を踏襲せず、晩明の浮薄輕佻の風を努めて矯正したので、それで、彼の詩には時代の息遣いが頗る濃厚である。例えば「下上謡」十二首は、古樂府の形式で以て開封で黄河が決壊してのちの人民の悲惨な生活を唱い、人に涙を催させる。彼はまた詩を用いて統治階級のひどい欲張り腹黒さを暴き、

攫金不誨盜 獲得以廉名 金を攫りて 盜と誨へずして 廉を以ての名
を獲得し

殺人寄他手 獲得以恕称 人を殺すに 他手に寄せ 恕を以ての称を獲
得す (「悲歌」)

彼の詩は多く感ずるところがあつて作り、己の考えを直叙し、質朴实質で穩健である。偶に「懊惱歌」のような小詩は、清新活発で、また別の風格がある。錢謙益は周亮工の詩を批評して「情深くして文明らかに、言近くして指遠く、雅致を包函し、塵俗を蕩滌あらかし、卓然として古人を以て指帰となし復た昔人の兔徑と今世の鼠穴に墜ちず」と記してい

る。

詩文のほか、周亮工は書畫金石を酷愛し、鑑賞品評に精確で、家に頼古堂を建て、書画印章を収蔵した。『印人伝』『説画録』など正確で透徹した見解がある。周亮工本人は山水画を擅いままにし、漢の隸書を好み、名が一時世間に知れわたるほどであった。彼はさらに硯墨を所蔵するのを好み、かつては祭墨の会を挙行し、優雅な興趣が溢れていた。

周亮工の著述は非常に豊富である。ただ、二度の下獄の禍により彼は深い打撃を受けた。二度目に釈放された後の晩、突然あらゆる著作及び蔵版を火にくべて、感慨深く溜息をついて云った。「一生虚名に誤られ、老いて 何ぞ尚お之を留めんや」と、曲折的に清朝統治者に対する不満を述べている。周亮工の著作は伝世のものは前述の諸もろ以外、さらに『頼古堂集』『書影』『字蝕』『同書』『閩小記』など十数種ある。『四庫全書』にはもともと周亮工の著作を五種・存目三種を著録していた。乾隆五十二年(1787)更なる一律審査毀損が行われ、すでに『四庫提要』中に彼の名前がある箇所すべて抜かれたので、それ故、周亮工の著作は広く流伝しなかった。

原注

①五泄湖は浙江諸暨県城外にあり、山中の五瀑布集まるところは風景秀麗で人に喜ばれる。

②周亮工『頼古堂集』卷三「孫北海夫子、亮の為に田を買う」。

③張元奇に拠れば、光緒『邵武府志』卷十三「寇警」掲載、熊裁法・秦登虎はもと清の將軍郭天才の部下であり、命令で邵武城南に駐屯した。郭天才が叛旗を翻し熊裁法・秦登虎とおそらく順治五年四月丁丑三更に邵武を襲撃した。周亮工は諜報で知ったのち、警戒して守備し

夜警し撃鼓進軍させなかった。「味爽に及びて、我が兵四もより集まり、秦・熊の兵は倉皇として迎戦し、于是これを尽く殲(滅)す」と。周亮工の門人黃虞稷も記している。叛乱軍將軍某は「城中の単弱なるを窺い知り、また賊と通謀し、夜四鼓を以て翻城(街をひっくり返す)せんとするに、先生(周亮工)其の情を廉べ得て密に、鼓吏に命じ通夜二つ下すを祇らせしめ、甲士に勅して夜半声砲もて其の備無きを攻めさせ、賊倉皇として措くなく、叛卒三千人を殲(滅)す」と。

④魯曾煜・乾隆『福州府志』卷四六「名宦」一「周亮工」

⑤張元奇・光緒『邵武府志』卷十三「寇警」。

⑥乾隆『延平府志』(同治補刻)卷十一「征撫」記「吳賽娘、順昌人。將樂に僑寓し、白蓮教を起し多くの人を惑わし聚む」。李世熊「寇変記」(『清史史料』第一輯掲載)に「福建に吳細娘あり」と記し「細娘、名は一星、順昌人。始め兄弟は徳化王に従い起義す。王敗れ、一星二百余人を率いて將樂・歸化の界に往來す」と。貫籍から、主要な活動地点と両書の記載時間(どちらも順治八・九年前後)、更に「賽」と「細」と両字同声で、読音が似ている状況からみて、細娘と賽娘とは同一人であろう。李世熊の見聞目睹に拠れば、吳細娘が率いる軍隊は「平民を撫せず、専ら私怨を報ず。其の卒を御するは頗る嚴にして、屢、寡きを以て衆を挫き、官兵も之を憚る」と。過ぎる所の郷邑、秋毫も犯すなく、因つて李世熊に「誰か暴客の無礼有らん」の感嘆がある。これは側面から吳賽娘の軍隊が農民起義の性格をもった軍隊であることを反映している。吳賽娘の反乱を平定する事に関して、『頼古堂集』の諸序及びその子の作った所の引用に拠れば、これらは周亮工が順治八・九年中に為したことであると均しく謂う。ただ、

『延平府志』卷一一「征戰」に掲載する「延平守備(官)柴自新は先ず単騎で呉賽娘の要塞に入り、招撫を進めたが、呉賽娘には決して投降する意志はなかった。明るる日に柴自新はその不備に乗じて「驟かに力を起こし奮い賽娘の頸を斬り、衣を用いて之を裹み、大いに呼ばわりて、楼より躍り下り、随行の兵を率いて囲みを突きて出たり」。呉賽娘の隊伍はようやく「各、逃散」した。これ以前に周亮工は呉を包圍殲滅しようとしたけれども、最終的に撲滅できていなかったことが分かる。まさしく『延平府志』に「圍剿すること数年なるも下らず」して、ずっと柴自新の頃になって、ようやく本当に呉賽娘を殺害し、このときの武装隊伍を鎮圧したのである。

⑦⑧ 『頼古堂集』附録、黄虞稷(1642～1691)「行状」。

⑨ 『清史列伝』卷七九「貳臣伝」乙「周亮工」。

⑩ 『頼古堂集』附録、周亮工の学生・黄虞稷の記するところに拠れば

⑪ 『清世祖実録』卷九一、偽滿(満州国)影印本、第一六頁。

⑫ 同注⑦

⑬ 同注⑨

⑭ 李因・咸豊『青州府志』卷三七、「伝」一之四「周亮工」

⑮ 周亮工・『書影』、姜承烈序、上海古籍出版社(1981)出版。

⑯ 『書影』高阜序。

⑰ 同注⑦

⑱ 『頼古堂集』卷一「悲歌」。

⑲ 『頼古堂集』錢謙益序。

⑳ 『頼古堂集』附録、錢陸燦「墓誌銘」。

㉑ 蘇融に拠れば、『惕齋見聞録』に「周亮工、御史なり。偽將軍劉の賊幕下に入り記室となる。歌唱し狎^{なれなれし}匿となりて、独り刑より免る」とい

う。周亮工は李自成が北京で勝利したのち、かつて大順朝に降伏したと謂う。このことは恐らく不確かなことであろう。計六奇は周亮工を「幸免諸臣」に並べ入れた(『明季北略』卷之二二、中華書局1982年版、下冊、594頁)。また、『欽定国史貳臣表伝』は周亮工を乙編に収め、乙編下は明臣が「賊党に随従し、その後清に降った」貳臣としてはいない。(日本)神田信夫『清朝の「国史列伝」と「貳臣伝」』参照。『清史研究通訊』1989年第3期)すべて証明される。

C 歸莊 伝 『清代人物伝稿 上編 第一卷』(2000-2005頁)

王思治

歸莊は明萬曆四十一年(1613)に生まれ、清康熙十二年(1673)に卒した。字は玄恭、号は恒軒、江蘇崑山の人である。歸莊は明末に生まれ清初に成長し、明代博学で文章が上手で世には名が聞こえていた帰有光の曾孫である。歸氏一門の家代々伝わった学問は淵源が深く、彼の父・歸昌世も詩文で名が知られ、「(三)才子」と称され、草書に長じ更に墨竹に精通していた。歸莊は幼年から家代々伝わった学問の薫陶を受けて、錢謙益は

子為太僕孫 家学承古始 子 太僕(有光)の孫たり、家学は古を承けて始む

錢謙益「贈歸玄恭八十二韻戲效玄恭体」①

と詠じている。歸莊が諸生のとき、已に群書を博渉し、筆を下して書けば数千言に止まらなかった。彼は詩文・作曲ができ、竹石を描くのが上手で、その草書は技術が最も深遠で、時の人々は絶倫と見なし、自分からも「狂草は近人に匹敵するものなし」と謂った。歸莊は学識の根底が深く厚かったので、さらに加えて明滅亡後、

孤憤填胸臆 沈憂滯骨髓 孤憤 胸臆に填まり 沈憂骨髓に滯る

錢謙益「贈歸玄恭八十二韻戲效玄恭体」②

胸一杯の悲憤が筆墨の間に落ち、それにより彼の文を論ずるものはその文は、「波瀾にして老成、ある傲然さが自ずと他と異なり、不拔の慨嘆が確かで、はたと字句の外にその人物を見るように分かる」と(張大庸「歸玄恭文鈔序」③)。ある人は、「先生の文章気節、亭林(顧炎武)に譲らず」④と認めている(王徳森「歸高士遺集序」)。彼の文風は曾祖・帰有光の散文と風格が同じではない。歸莊の詩文書画の造詣は非常に深

く、彼は学習上で一家の限界とするところに拘束されず、「書に於いて窺はざるところなく、」それにより「文詞書画、衆人が秀でるところも掩うように残らず自分のものとなっている」⑤。

歸莊は明清の交代期に生活をおくった。崇禎二年(1629)、彼が十七歳のとき、顧炎武らと同じく復社に入り、深く闖党が国を台無しにするのを憎んだ。明王朝の国勢が日増しに急迫するに随い、彼は国を憂い時代を傷む心情が日々増していった。一方では、猛烈な勢いで起る農民大起義を痛烈に憎み、同時に官軍が農民軍を鎮圧防止できないこと、満清軍が猛り狂うことに対しても恨みを抑えられなかった。彼は明王朝の安危に心を寄せたが、しかし

封章邸報事多諱 封章 邸報 事に諱むこと多し
千里終恨耳不長 千里終に恨む 耳長ぜざるを

歸莊「聞警口占短歌」⑥

明政府がさんざんに大敗しているのを文飾して、確実な情報を得られず、「胡虜縦横し賊更に劇し」く、兵戈が騒動を起こし、狼煙が各地から上がる局面に、帰莊は常に頭をあげ 蒼天を望み、北の方角・北京を望み、一人嘆き、明朝の国運の為に祈禱して

天若祚明無此事 天若し明に祚ありて此の事なからば
会聴雲外迅雷収 会す雲外 迅雷の収むるを聴かん

歸莊「感事寄二受翁(二首)」⑦

と詠じ、明政府が迅速に国内を肅正し、危険を転化して安寧となし、中原兵荒禍已極 中原兵荒 禍已に極れり
我欲回天苦無力 我回天せんと欲するも 苦だ力なし

歸莊「日食」⑧

と嘆息し、このような時代を傷み国を憂える情懷が彼のこの時期の吟唱

のテーマであった。

明が滅亡したとき、帰莊はすでに三十二歳である。彼の父（帰昌世）は、わが身が国の変乱に遭遇したと思い、異常に悲しみ泣き、よくよく嘆息してしのび泣きし涙を吞んでいた。帰莊は故国である明の滅亡に対する思いが尤も深痛なものとなった。彼は「除夕七十韻」詩^⑨のなかで、まるで血涙を用いて自己の当時の心情を描いている。

萬古痛心事 崇禎之甲申 萬古痛心の事 崇禎の甲申 (1644)

天地忽崩陷 日月並湮淪 天地忽ち崩れ落ち 日月並びに湮淪せり

当時哀憤切 情詞難具陳 当時 哀憤切に 情詞 具陳し難し

それで李自成の大順軍に対し、痛烈に譏りとがめ、口筆で誅伐を加えた。順治二年(1645)、清軍が軍に号令し南下すると、彼の次兄帰昭

(字は爾徳)は単騎で危い揚州に馳せて、揚州の防御に従事した。帰莊はその兄に代わり「上史閣部書」(史閣部に上るの書)を代筆し、筆を投じて従軍を志願し、劍を放さず軍門を敲き求仕し、国のために國難

に赴く勇ましい志を表し述べた。あわせて「送二兄爾徳赴史閣部幕府」という詩に「(帰) 莊も亦た慷慨の士 (立功志横草 方將厲羽翮)」と

「豈に敢えて肝腦を惜しまんや^⑩」と表明した。歸昭は史可法が揚州西門を防衛するのに協力援助し、都市が陥落し難に死した。歸莊は非常に極めて悲しみ憤り、「君の壯志長才を以てして展ばすを得ず、然れども卒に忠義に死す」^⑪ (『京兆歸氏世譜』卷十「德行識」と述べた。歸莊

はこのため扼腕した。五月、清軍が長江を渡り南京を占領して後、六月、崑山県丞攝縣令事である閻茂才が剃髮令をくだすと、士民大いに騒ぎ、県政府に閻の声をあげ、大衆は閻茂才を捕らえ、歸莊はみんなに彼を処刑するように申した。そこで大衆は旧の狼山総兵・崑山人王佐才を推挙し軍隊指導者とし、城門を閉じ反抗死守し、拳兵し清に抵抗した。

歸莊・顧炎武・呉其沅らは皆王佐才の軍を助けた。旧曆七月六日、清軍は崑山を破り、死者は四万人であった。歸氏一門も多くが難に遭遇し、歸莊と顧炎武は脱出することが出来た。歸莊は清軍の大殺戮を描写している。一場の大災害が経過した後の崑山の情景と、自分の志向とを重ね開陳し、

城陣一旦馳鐵騎 城の陣 一旦にして 鐵騎馳せ

街衢十日流膏血 街衢十日膏血流る

白昼啾啾聞鬼哭 白昼啾啾として 鬼哭聞こゆ

烏鳶蠅蚋争人肉 烏鳶蠅蚋 人肉を争い

一二遺黎命如絲 一二の遺黎 命絲の如し

又為偽官迫攝頭半禿 又偽官の頭半禿を撮るを迫るところとなる

悲崑山 崑山城誠可悲 崑山を悲しみ 崑山 城誠に悲しむべし

死為枯骨亦已矣 死して枯骨となるも亦た已みなん

那堪生而俯首事逆夷 那んぞ生きて俯首し逆夷に事うるに堪へんや

歸莊「悲崑山」^⑫

彼は清に仕える意はないが、しかし、彼が首唱して県令閻茂才を殺害させたことにより、それによって指名逮捕されるので、やむを得ず僧装に変装して、亡命し跡を眩ませ、世間を放浪した。事が緩やかになると、故郷に帰り、茅屋を先祖の墓所あたりに築き、此より終身狂人と詐り通した。

歸莊は黒袈裟僧帽であったり、あるときは檻樓^⑬が膝を隠すだけであり、鬢髪もあごを掩い、酒びたりであった。彼は一生涯、南は錢唐江を渡り、北は長江淮水を涉り、あるときは仏寺に寄寓し、あるときは友人の家に投宿し、放蕩不羈であり、友人と詩酒を交わし応酬した。名山大川にやってくるごとに古今の人の御霊を祭り、痛哭して涙を流し、それ

を見た者は多く驚き怪しんだ。

歸莊は偽って風顛を装い、世俗と少しも同調することなく、世の人は「怪」と目し「婦の痴れ者」とか「狂生」と呼んだ。彼の日頃の良友は顧炎武であり、両名ともに博学の士で、また明朝回復の志があり、これにより「博雅独行相推許」^⑬し、それで「婦奇顧怪」の呼び名がある。けれども、佯狂（狂と詐る）、怪痴で掩つても却つて故明を忘れない赤熱の心根であり、傲然と独立し、清朝の統治に対する不屈不撓の遺民の節操である。彼は自分の庵を墓の側に建て、自らその茅屋に對聯を題した。その文には

両口寄安樂之窩 妻太聡明夫太怪 両口 安樂の窩に寄り 妻太だ聡明

夫太だ怪しむ

四隣接幽冥之宅 人何寥落鬼何多 四隣 幽冥の宅に接し 人何ぞ寥落

鬼何ぞ多し

^⑭と署した。この對聯は、人が少なく幽霊が多いことで王朝の統治と世俗とを比喩し、世人みな死に自分一人生きる慨嘆を大いに有する。けれども、多くの人はその心意を察せず、その對聯を言い伝えて笑いぐさとし、啓顔録わらひばなに入れられると謂う。歸莊はよくその名字を変えてあるとき「婦妹」「婦來乎」と称したり、字は「元功」「懸弓」^⑮などと表した。時がたつてまた名を「祚明」「普明頭陀」と変え、みな明朝を思い故物を回復せんとすることを寓意している。さらに他の独り憤る作品では非常にひろく『萬古愁』曲が流伝し、この曲子は過ぎ去りし歴史を思うままに疾駆し、古からの所謂聖賢なる君主宰相に対し、痛烈に糾弾を加えずにはおかず、「騙呆人弄獼猴の圈套」（呆人を騙し獼猴の圈套を弄す）（『萬古愁』^⑯）と認めた。

歴代の興亡、桑海の変遷に対してまた痛哭し涙を流した。とりわけ明

の滅亡に対し、「痛まし痛まし痛まし。痛ましきは是れ十七載聖明の天子の横尸、長安道に在り」と詠じている。頭に烏紗帽子をいただき、腰には黄金の帯を巻いている榮達した顯貴の高官たちは、平日ではただ「狐朋に倚り狗党を樹て蝸蛄と般おなじく喧噪」、一旦国難がやって来ると、却つて「狗苟蠅營、還た幾句かの勸進表を懐き着く」であり、歸莊はさらに高らかに「便ち萬斬するも饒しがたし」^⑰と唄う。この曲が清王朝宮廷に伝わり、順治帝福臨は大いに気に入ったので、食事の時、常々楽工に命じて歌わせて食事を進めた。南明史跡の研究に志のある全祖望は、ただ一人曲中から作者の苦心を透視し、彼は「蓋し『離騷』『天問』一種の手筆なり」と評した。全祖望はこの曲中から屈原の悲歌を聞き取り、作者の憂愁憤懣を感じたし、これによって清帝福臨がこのように萬古愁曲を鑑賞しても、彼の大惑は解けなかった。彼は「明の遺民野老は、明清の変を痛哭する者であり、おおよそ皆、残山剩水（戦乱の後の荒れ果てた山や川）に潜伏しており、彼らの著述が広く流伝するのは不可能であるが、ただこの萬古愁曲だけが「興朝の鐘呂を博するを得」たのは「また一異事」であると言う（全祖望「題歸恒軒萬古愁曲子」）。だから当時、歸莊の胸の内を覗ける人は皆、「（歸）玄恭、実に痴ならず」^⑱と言った。

清朝時代に入つて後、歸莊はすでに家門没落し、赤貧洗うが如しであった。彼は居室の柱に對聯を題して云う。

入其室空空如也 其の室に入れば 空空如たるなり

問其人囂囂然曰^⑳ 其の人に問はば 囂囂然と曰ふ

これは家の状況が貧乏ながらも、囂囂として不羈、嬉笑怒罵し、ただ彼の生活は十分に清貧で苦しかった。茅屋柴門は破れて開かないようになり椅子も壊れて坐れないほどで、彼は紐で結びつけるほかできないが、

欣然として自得しており、「結繩して治まる」と大書した。大晦日の夜、家々では玄関の大門に春聯を張って、年の吉祥意のごとくなるようにと祈るところ、彼の対聯は

一槍戮出窮鬼去 一槍もて窮鬼を戮し出だし去り
双鉤搭進富神来 双鉤もて富神を搭ぎ進み来る

②であった。人からは出鱈目だと笑われた。

帰荘は貧しいけれども、人の饋贈を受けず、また書画を売ろうともしなかった。彼は草書が非常に優れており、乞い求める者が甚だ多数であつた。彼は漫りにいい加減に應じてまたずと約束を果たすことはなく、実際自分の墨跡を珍宝とし、多くを家に蔵して、これまで軽々しく人に示すことはなかった。彼は酒を嗜み、飲んだあと慷慨激昂し、傍若無人で、知識人士も往々にして彼の談話に傾倒した。一説では、酒を飲むと書画を作るようになり、長箋であろうと短幅であろうと、揮毫して倦まなかったが、貴介（富貴）の人が歓迎しても応ずることはなかった。晩年甚だ貧しく、自分でも食っていけず、僧堂に寄宿しながら、曾祖父帰有光全集の収集刊刻に努めたが、成就せずに亡くなった。士大夫や知識分子はこれに対して深く痛惜の念を表明した。帰荘が亡くなった時すでに、顧炎武は北上の旅に上っており、章邱（山東省）で帰荘の訃報を知り得、特に桑家荘でそのために祭壇を設け祭り、「帰高士を哭す」詩四首を作った。その中で

峻節冠吾儕 危言警世俗 峻節 吾が儕に冠たり 危言 世俗を警す
常為扣角歌 不作窮途哭 常に扣角歌（戦闘歌）を為し（阮籍）窮途の
哭を作さず

生耽一壺酒 殤無半間屋 生きて耽る 一壺の酒 殤して半間の屋も
なし

惟存孤竹心 庶比黔婁 惟だ存す孤竹の心 庶くば黔婁に比せん②
顧炎武のこの詩には、大体帰荘の生涯が概括されており、また清初のかなりの遺民たちの姿でもあり、このような人々の精神思想の様相を反映している。

帰荘の著述は非常に多く、文集には『懸弓集』三十卷、『恒軒文集』十二卷があるが、ただ刊行するだけの力がなく、満清王朝の忌避を觸犯する語が多く、それ故ほぼ二百年も埋もれていた。道光年間になり、太倉の季錫畴と常熟の趙允懐とが彼の遺文を輯集して『玄恭文鈔』又詩一卷を作ったが、後に雕版が戦争で破壊され、その書は得るのが難しい。清末になると、朱紹成が十数年の搜索考究を経て『歸高士遺集』十巻を編成し、帰曾裔が『歸玄恭文鈔録』七巻を編成し、徐崇恩が『歸玄恭遺書』を編成した。一九六一年、中華書局は以上三種類の書籍を基礎にし、解放後発見された帰荘の詩原稿および北京図書館所蔵本を増補し、関係する書籍中より輯めて得られた詩・詞・文若干篇を併せて、『歸莊集』十巻を編成した。

原注

- ① 錢謙益：『贈歸玄恭八十二韻戲效玄恭体』。『歸莊集』 582頁。
- ② 同上。
- ③ 張大鏞：『歸玄恭文鈔序』。『歸莊集』 591頁。
- ④ 王德森：『歸高士遺集序』。『歸莊集』 595頁。
- ⑤ 『京兆歸氏世譜』卷九「事跡鈔」。
- ⑥ 『歸莊集』16頁。
- ⑦ 同上、25頁。
- ⑧ 同⑦。

- ⑨ 『歸莊集』 35頁。
- ⑩ 同上、32頁。
- ⑪ 『京兆婦氏世譜』 卷十「德行識」
- ⑫ 『歸莊集』 37-38頁。
- ⑬ 「練川名人画像」。『歸莊集』 577頁。
- ⑭ 「觚剩統編」。『歸莊集』 577頁。
- ⑮ 朱彝村『靜志居詩話』。『歸莊集』 577頁。
- ⑯ 「萬古愁」。『歸莊集』 158頁。
- ⑰ 同上、『歸莊集』 159・160頁。
- ⑱ 全祖望「題歸恒軒萬古愁曲子」。『歸莊集』 589頁。
- ⑲ 同⑭。
- ⑳ 同⑮。
- ㉑ 王應奎「柳南隨筆」。『歸莊集』 577頁。
- ㉒ 『顧亭林詩文集』 卷四。詩中でいう「扣角歌」の「角」は軍中の吹奏楽器を指す、すなわち所謂「画角」のこと。「扣角歌」を現代語に訳すと、つまり「戦闘の歌」の意味である。黔婁は即ち黔婁先生で、古の賢士、非常に貧しく死後も屍体を包む経帷子もなく、後の人は貧士の例とした。

〔付記〕 本稿は平成二四～二六年度科学研究費補助金(基礎研究C)「内閣文庫蔵『過日集』の総合的研究」による研究成果の一部である。

